Oracle Internet Directory for UNIX

インストレーション・ガイド

リリース 2.1.1

2001 年 10 月

部品番号 : J04354-01

ORACLE®

Oracle Internet Directory for UNIX インストレーション・ガイド , リリース 2.1.1

部品番号 : J04354-01

原本名 ：Oracle Internet Directory Installation Guide, Release 2.1.1 AIX-Based Systems, Compaq Tru64 UNIX, HP 9000 Series HP-UX, Linux Intel, Solaris Intel, and Sun SPARC Solaris

原本部品番号 ：A88797-01

原本著者 ：Sutapa M. Kuthiala

原本協力者 ：Oanh Duong, Richard Smith (Sun SPARC Solaris), Caroline Johnston, Doug Williams.

Copyright © 1996, 2001, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されております。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに iii

対象読者 iv
このマニュアルの編成 iv
関連ドキュメント iv
マニュアルの表記規則 v

1 システム要件

インストールの概要 1-2
システムのインストール要件 1-2
ハードウェア要件 1-3
オペレーティング・システムのソフトウェア要件 1-4
Oracle Internet Directory 固有のその他のインストール要件 1-11
インストール固有の問題および制限事項 1-11
Hummingbird Exceed の使用 1-11
新しい ORACLE_HOME 1-11
Java 実行時環境（JRE） 1-12
キャラクタ・モード 1-14
ファイル・システム 1-14
Solaris 2.3、2.4 および 2.5 1-14

2 インストール前の作業

UNIX システムの設定 2-2
セットアップ作業について 2-7
root ユーザーで実行するセットアップ作業 2-7

oracle ユーザーで実行するセットアップ作業 2-11
Oracle Internet Directory のセットアップ作業 2-14

3 インストール

Oracle Universal Installer 3-2
Oracle Internet Directory CD-ROM のマウント 3-2
Oracle Universal Installer（OUI）の起動 3-5
インストールの実行 3-6
インストール・セッションのログの表示 3-14
インストールの失敗後のクリーン・アップ 3-14
非対話モードの（サイレント）インストールおよび設定 3-15
レスポンス・ファイルの指定 3-16
サイレント・モードによる初めてのインストール 3-16
エラー処理 3-17
レスポンス・ファイルの値の妥当性チェック 3-17

4 インストール後の作業

ユーザー・パスワード 4-2
root ユーザーで実行する設定作業 4-2
***oracle* ユーザーで実行する設定作業** 4-6
UNIX アカウントの起動ファイルの更新 4-6
環境変数の設定 4-6
初期化パラメータの設定 4-11
Oracle Internet Directory のインストール後の作業 4-12
インストール後の初期データベースの内容の確認 4-12
データベースの識別 4-12
表領域およびデータ・ファイル 4-13
初期化パラメータ・ファイル 4-14
REDO ログ・ファイル 4-15
制御ファイル 4-15
ロールバック・セグメント 4-16
データ・ディクショナリ 4-17
Oracle Internet Directory のアンインストール 4-17

索引

はじめに

『Oracle Internet Directory for UNIX インストレーション・ガイド』では、Oracle Internet Directory 製品のインストール手順を説明します。

「はじめに」には、次のトピックが含まれます。

- 対象読者
- このマニュアルの編成
- 関連ドキュメント
- マニュアルの表記規則

対象読者

『Oracle Internet Directory for UNIX インストレーション・ガイド』のこのリリースは、Oracle Internet Directory リリース 2.1.1 の AIX-Based Systems、Compaq Tru64 UNIX、HP 9000 Series HP-UX、Linux Intel、Solaris Intel および Sun SPARC Solaris 上へのインストールを担当する方を対象にしています。この Oracle Internet Directory は、Oracle9*i* Application Server リリース 1.0.2.2 に付属しています。

このマニュアルでは、ご使用のオペレーティング・システムにすでに習熟していることを前提としています。Oracle Internet Directory のインストールには、Oracle Universal Installer を使用します。

このマニュアルの編成

このマニュアルには、次の章が含まれています。

第 1 章「システム要件」

この章では、Oracle Internet Directory を AIX-Based Systems、Compaq Tru64 UNIX、HP 9000 Series HP-UX、Linux Intel、Solaris Intel および Sun SPARC Solaris にインストールするための要件と、今回のリリースの制限事項について説明します。

第 2 章「インストール前の作業」

この章では、Oracle Internet Directory のインストールのためのシステムの準備について説明します。

第 3 章「インストール」

この章では、Oracle Universal Installer の起動方法と、Oracle Internet Directory をシステムにインストールする手順について説明します。

第 4 章「インストール後の作業」

Oracle Universal Installer のセッション完了後、いくつかのインストール後の作業を実行し、Oracle8*i* を設定する必要があります。この章では、これらの必須ステップおよびオプションのステップについて説明します。

関連ドキュメント

追加情報は、次の文献またはサイトを参照してください。

- David Chadwick 著『Understanding X.500—The Directory』Thomson Computer Press（1996 年）
- Tim Howes、Smith Mark 著『LDAP: Programming Directory-enabled Applications with Lightweight Directory Access Protocol』Macmillan Technical Publishing（1997 年）

- Tim Howes、Mark Smith、Gordon Good 著『Understanding and Deploying LDAP Directory Services』Macmillan Technical Publishing（1999 年）
- オブジェクト識別子の詳細は、Internet Assigned Numbers Authority のホームページを参照してください。
  http://www.iana.org
- Internet Engineering Task Force（IETF）のドキュメント。特に次のページまたはサイトを参照してください。
  - http://www.ietf.org
    （IETF のホーム・ページ）
  - http://www.ietf.org/html.charters/ldapext-charter.html
    （ldapext チャーターおよび LDAP ドラフト）
  - http://www.ietf.org/html.charters/ldup-charter.html
    （LDUP チャーターおよびドラフト）
  - http://www.ietf.org/rfc/rfc2254.txt
    「The String Representation of LDAP Search Filters」
  - http://www.ietf.org/rfc/rfc1823.txt
    「The LDAP Application Program Interface」
  - http://www.openldap.org （OpenLDAP コミュニティ）

マニュアルの表記規則

この項では、このマニュアルのテキストおよびコード例に使用されている表記規則について説明します。ここで説明する内容は、次のとおりです。

- テキストの表記規則
- コード例の表記規則

テキストの表記規則

特別な用語を識別しやすいように、テキスト内では様々な表記規則が使用されています。次の表で、これらの表記規則について説明し、その使用例を示します。

表記規則	意味	例
太字	太字は、テキスト内で定義されている用語を示します。	**ub4**、**sword** または **OCINumber** などの C データ型が有効です。 この句を指定することにより、**索引構成表**が作成されます。
大文字の固定幅フォント	大文字の固定幅フォントは、システムによって提供される要素を示します。これらの要素には、パラメータ、権限、データ型、RMAN キーワード、SQL キーワード、SQL*Plus またはユーティリティのコマンド、パッケージ、メソッド、システム提供の列名、データベース・オブジェクトおよび構造体、ユーザー名およびロールが含まれます。	この句は、NUMBER 列にのみ指定可能です。 データベースをバックアップするには、BACKUP コマンドを使用します。 USER_TABLES データのディクショナリ・ビューの TABLE_NAME 列を問い合せます。 DBMS_STATS.GENERATE_STATS プロシージャを使用します。
小文字の固定幅フォント	小文字の固定幅フォントは、実行可能ファイル、ファイル名、ディレクトリ名およびユーザー定義要素のサンプルを示します。これらの要素には、コンピュータ名、データベース名、ネット・サービス名および接続識別子、さらにユーザー定義のデータベース・オブジェクトおよび構造体、列名、パッケージおよびクラス、ユーザー名およびロール、プログラムの単位およびパラメータ値が含まれます。 **注意 :** 一部のプログラム要素では、大文字と小文字の両方が使用されています。これらの要素は、表示されているとおりに入力してください。	sqlplus と入力し、SQL*Plus を開きます。 パスワードは orapwd ファイルで指定されています。 /disk1/oracle/dbs ディレクトリ内のデータファイルおよび制御ファイルのバックアップを作成します。 department_id、department_name および location_id 列は、hr.departments 表内に存在します。 QUERY_REWRITE_ENABLED 初期化パラメータを true に設定します。 oe ユーザーで接続します。 JRepUtil クラスにより、これらのメソッドがインプリメントされます。
小文字の固定幅フォントのイタリック体	小文字の固定幅フォントのイタリック体は、プレースホルダまたは変数を示します。	*parallel_clause* を指定できます。 U*old_release*.SQL を実行します。*old_release* は、アップグレード前にインストール済みのリリースを示します。

コード例の表記規則

コード例では、SQL、PL/SQL、SQL*Plus またはその他のコマンドライン構文が示されます。これらには、次の例のように、固定幅フォントが使用され、一般のテキストと区別して表示されます。

```
SELECT username FROM dba_users WHERE username = 'MIGRATE';
```

次の表で、コード例に使用される表記規則を説明し、使用例を示します。

表記規則	意味	例
[ ]	大カッコ内には、1 つ以上のオプションの項目が含まれます。大カッコは入力しないでください。	`DECIMAL (digits [ , precision ])`
{ }	中カッコ内には 2 つ以上の項目が含まれ、そのうちの 1 つが必須であることを示します。中カッコは入力しないでください。	`{ENABLE | DISABLE}`
|	縦線は、大カッコまたは中カッコ内の選択肢を示します。これらのオプションのうちの 1 つを入力します。縦線は入力しないでください。	`{ENABLE | DISABLE}` `[COMPRESS | NOCOMPRESS]`
. . .	横方向の省略記号は、次のいずれかを示します。	
	■ コード中で例に直接関係のない部分が省略されている。	`CREATE TABLE ...AS subquery;`
	■ コード内の繰返し。	`SELECT col1, col2, ..., coln FROM employees;`
. . .	縦方向の省略記号は、コード中で、例に直接関係のない行が何行か省略されていることを示します。	
その他の表記	大カッコ、中カッコ、縦線および省略記号以外の記号は、表示されているとおりに入力する必要があります。	`acctbal NUMBER(11,2);` `acct CONSTANT NUMBER(4) := 3;`
イタリック体	イタリック体のテキストは、プレースホルダまたは特定の値を指定する必要のある変数を示します。	`CONNECT SYSTEM/system_password` `DB_NAME = database_name`

表記規則	意味	例

大文字	大文字で表記されている部分は、システムで定義されている要素を示します。ユーザーが定義する用語と区別するために、これらの用語は大文字で表記されます。用語が大カッコで囲まれている場合を除いて、表示されている順序およびスペルのとおりに入力します。ただし、これらの用語には大文字・小文字の区別がないため、小文字で入力しても構いません。	`SELECT last_name, employee_id FROM employees;`
		`SELECT * FROM USER_TABLES;`
		`DROP TABLE hr.employees;`

小文字	小文字で表記されている部分は、ユーザーが指定するプログラム要素を示します。たとえば、小文字は表、列またはファイルの名前を示します。
	注意：一部のプログラム要素では、大文字と小文字の両方が使用されています。これらの要素は、表示されているとおりに入力してください。
		`SELECT last_name, employee_id FROM employees;`
		`sqlplus hr/hr`
		`CREATE USER mjones IDENTIFIED BY ty3MU9;`

1

システム要件

インストールをすばやく、正しく行うためには、ローカル・システムが Oracle ソフトウェアの依存ソフトウェアおよび領域要件を満たしている必要があります。この章では、Oracle Internet Directory を AIX-Based Systems、Compaq Tru64 UNIX、HP 9000 Series HP-UX、Linux Intel、Solaris Intel および Sun SPARC Solaris にインストールするための要件と、今回のリリースの制限事項について説明します。インストールの開始前に、ご使用のシステムがこの章の要件を満たしていることを確認してください。

この章には、次のトピックが含まれます。

- インストールの概要
- システムのインストール要件
- インストール固有の問題および制限事項

インストールの概要

Oracle Internet Directory をインストールするには、次のステップを実行します。

1. 前提要件の確認 : ローカル・システムが、インストールする製品のハードウェア、ソフトウェア、メモリーおよびディスク領域の要件を満たしていることを確認します。これらの要件および制限事項については、この章で説明します。
2. インストール前の作業 : UNIX 環境が適切にセットアップされていることを確認し、インストールする製品のインストール前の作業を実行します。第 2 章「インストール前の作業」を参照してください。
3. インストール : ソフトウェア CD-ROM の Oracle Universal Installer を使用して、Oracle Internet Directory をインストールします。第 3 章「インストール」を参照してください。
4. インストール後の作業 : データベース・オブジェクトの作成、ユーザー環境の確立、および Oracle 製品のローカル・システム用の設定を行います。第 4 章「インストール後の作業」を参照してください。

システムのインストール要件

Oracle Internet Directory リリース 2.1.1 のインストール前に、ご使用のシステムが次の項で説明されている要件を満たしていることを確認してください。

- ハードウェア要件
- オペレーティング・システムのソフトウェア要件
- Oracle Internet Directory 固有のその他のインストール要件

ハードウェア要件

Oracle Internet Directory をインストールするためには、ご使用のシステムが表 1-1 に示すハードウェア要件を満たしている必要があります。

表 1-1 ハードウェア要件

ハードウェア項目	AIX-Based Systems	HP 9000 Series HP-UX	Compaq Tru64 UNIX	Solaris Intel	Sun SPARC Solaris	Linux Intel
CD-ROM デバイス	RockRidge 拡張 ISO 9660 形式 CD-ROM ディスク	RockRidge 拡張 ISO 9660 形式 CD-ROM ディスク	RockRidge 拡張 ISO 9660 形式 CD-ROM ディスク	Solaris Intel サポートの RockRidge 形式 CD-ROM ドライブ	RockRidge 拡張 ISO 9660 形式 CD-ROM ディスク	RockRidge 拡張 ISO 9660 形式 CD-ROM ディスク
ハード・ディスク領域	1050MB	970MB	960MB	699MB	810MB	810MB
メモリー	256MB	256MB	最低 128MB の RAM	最低 128MB の RAM	Oracle8*i* 製品をインストールするには、最低 128MB の RAM が必要です。Oracle8*i* クライアント製品には、64MB の RAM が必要です。	最低 128MB の RAM
スワップ領域	RAM の 2 倍	RAM の 2 倍	RAM の 2 倍または最低 400MB のうちの大きいほう	RAM の 2 倍	RAM の 2 倍または最低 400MB のうちの大きいほう	RAM の 2 倍または最低 400MB のうちの大きいほう

表 1-2 で示されているコマンドからご使用のプラットフォームに該当するものを使用して、必要な RAM メモリーおよびスワップ領域のバイトを決定してください。

表 1-2 RAM メモリーおよびスワップ領域を調べるためのコマンド

プラットフォーム	RAM メモリー
AIX-Based Systems	`$ /etc/lsattr -El mem0`
HP 9000 Series HP-UX	HP-UX 11.0 のパフォーマンス・モニター・ツール glance を使用 `$ glance`
Compaq Tru64 UNIX	`$ vmstat -p`

表 1-2 RAM メモリーおよびスワップ領域を調べるためのコマンド（続き）

プラットフォーム	RAM メモリー
Solaris Intel	`$ /usr/sbin/prtconf | grep size`
Sun SPARC Solaris	`$ /usr/sbin/prtconf | grep size`
Linux Intel	`$ cat /proc/meminfo | grep Memtotal`

Oracle Universal Installer に必要な一時ディスク領域

Oracle Universal Installer では、/tmp ディレクトリに最高 75MB の領域が必要です。/tmp に十分な領域が存在しない場合、十分な領域のあるディレクトリを TMP_DIR 環境変数に設定します。

オペレーティング・システムのソフトウェア要件

表 1-3 に、AIX-Based Systems のオペレーティング・システムのソフトウェア要件を示します。

表 1-3 AIX-Based Systems のオペレーティング・システムのソフトウェア要件

ソフトウェア項目	AIX-Based Systems 要件
オペレーティング・システム	■ AIX 4.3.2 以上。AIX バージョン 4.1、4.2、4.3.0 および 4.3.1 はサポートされていません。
オペレーティング・システムのパッチ	■ IX72696 Segmentation fault can occur in `WALK_LIBS (LOADANDINIT())` ■ IX81863 AIX process hangs in `listlio` and `liowait` ■ IX85104 `msgget()` returns a negative number ■ IX87313 64-bit application buffer cannot cross segment boundary ■ IX87382 Socket lock problem for `AF_UNIX` ■ IX89087 Thread doing `AIO` hangs in stress test ■ IX89552 System crashes with corrupted stack ■ IY02407 `AIO` bug in `v_movep` ■ IY03412 `aio_nwait` system call ■ 1Y05995 Thread missed wakeup in `aio_nwait()` ■ 1Y07276 `aio_suspend` returns without I/O completion on 00/03/09 PTF pechange ■ 1Y01050 Support for non-root access to kernel perf stat.

表 1-3 AIX-Based Systems のオペレーティング・システムのソフトウェア要件（続き）

ソフトウェア項目	AIX-Based Systems 要件
ウィンドウ・マネージャ	■ dtwm、twm、olwm など、IBM AIX のウィンドウ・マネージャでサポートされており、Motif をサポートしているものはすべて使用可能です。

表 1-4 に、Compaq Tru64 UNIX のオペレーティング・システムのソフトウェア要件を示します。

表 1-4 Compaq Tru64 UNIX のオペレーティング・システムのソフトウェア要件

ソフトウェア項目	Compaq Tru64 UNIX 要件
オペレーティング・システム	■ Compaq Tru64 UNIX 4.0D、4.0E、4.0F、4.0G、5.0A または 5.0
オペレーティング・システムのパッチ	■ Compaq Tru64 UNIX の最新のパッチ・キットを使用してください。Compaq Tru64 UNIX のパッチに関する情報は、次の URL を参照してください。 http://www.compaq.com/support ■ リリース 2.1.1 を正しくインストールするには、次のものが必要です。 Tru64 UNIX バージョン 4.0D では、Patch Kit 4 以上が必要です。 Tru64 UNIX バージョン 4.0E では、Patch Kit 2 以上が必要です。 Tru64 UNIX バージョン 4.0F では、Patch Kit 1 以上が必要です。
ウィンドウ・マネージャ	■ インストーラを実行するシステムに X Windows がインストールされている必要があります。Compaq でサポートされている X Windows サーバー（dtwm、twm、olwm など）はすべて使用可能です。グラフィック製品を実行するには、X 環境、Basic X Environment（OSF11）および X Servers（OSFSER）が必要です。
オペレーティング・システム・パッケージ	■ OSFLIBA、OSFPGMR および OSFCMPLRS サブセット。これらのサブセットは、Compaq Tru64 UNIX オペレーティング・システムに含まれています。
必須の実行ファイル	■ /usr/ccs/bin ディレクトリに、make、ar、ld および nm の実行ファイルが存在している必要があります。

表 1-5 に、HP 9000 Series HP-UX のオペレーティング・システムのソフトウェア要件を示します。

表 1-5 HP 9000 Series HP-UX のオペレーティング・システムのソフトウェア要件

ソフトウェア項目	HP 9000 Series HP-UX 要件
オペレーティング・システム	■ HP-UX 11.0（32 ビット）
オペレーティング・システムのパッチ	■ DART 49, June 2000
ウィンドウ・マネージャ	■ インストーラを実行するシステムに X Windows がインストールされている必要があります。HP-UX 11.0 でサポートされている X Windows サーバーはすべて使用可能です。
必須の実行ファイル	■ `/usr/ccs/bin` ディレクトリに、`make`、`ar`、`ld`、`nm` および `cc` の実行ファイルが存在している必要があります。

表 1-6 に、Linux Intel のオペレーティング・システムのソフトウェア要件を示します。

表 1-6 Linux Intel のオペレーティング・システムのソフトウェア要件

ソフトウェア項目	Linux Intel 要件
オペレーティング・システム	■ Linux Kernel 2.2.16-3 以上
ウィンドウ・マネージャ	■ `fvwm` など、Motif バージョン 1.2 をサポートしているウィンドウ・マネージャはすべて使用可能です。リリース 2.1.1 では、キャラクタ・モードのインストールはサポートされていません。1-14 ページのキャラクタ・モードを参照してください。
必須の実行ファイル	■ `/usr/bin` ディレクトリに、`make`、`ar`、`ld` および `nm` の実行ファイルが存在している必要があります。

表 1-7 に、Solaris Intel のオペレーティング・システムのソフトウェア要件を示します。

表 1-7 Solaris Intel のオペレーティング・システム要件

ソフトウェア項目	Solaris Intel 要件
オペレーティング・システム	■ Solaris7 for Intel。11/99 パッチをお薦めします。C コンパイラは、インストールには必要ありませんが、C のデモンストレーション・プログラムのコンパイルに必要です。
オペレーティング・システムのパッチ	■ Solaris Intel 用の最新のカーネル・パッチを使用してください。Sun 社の次のサイトで、パッチに関する情報が提供されています。 http://sunsolve.sun.com Oracle Internet Directory を正しくインストールするには、Solaris Intel に kernel jumbo パッチ #106542-09 が必要です。
ULIMIT 値の削除	■ Oracle Internet Directory のインストール前に、ULIMIT の値が含まれている行を /etc/default/login ファイルから削除する必要があります。/etc/default/login の ULIMIT のデフォルト値を使用して Oracle Internet Directory をインストールすることはできません。
GUI 要件	■ Solaris Intel 同梱の Motif Runtime Kit パッケージ SUNWmfrun をインストールします。 UNIX カーネル・パラメータを再設定します。 ■ Solaris7 Server をインストールする前に、UNIX カーネルを再設定する必要があります。デフォルトの UNIX カーネルを使用して Oracle Internet Directory をインストールすることはできません。

表 1-8 に、Sun SPARC Solaris のオペレーティング・システムのソフトウェア要件を示します。

表 1-8 Sun SPARC Solaris のオペレーティング・システムのソフトウェア要件

ソフトウェア項目	Sun SPARC Solaris 要件
オペレーティング・システム	■ Solaris 2.6 または 2.7
オペレーティング・システム・パッケージ	■ SUNWarc、SUNWbtool、SUNWhea、SUNWlibm、SUNWlibms、SUNWsprot、SUNWtoo

表 1-8 Sun SPARC Solaris のオペレーティング・システムのソフトウェア要件

ソフトウェア項目	Sun SPARC Solaris 要件
オペレーティング・システムのパッチ	■ Sun 社提供の最新のカーネル・パッチを使用してください。Sun 社の次のサイトで、パッチに関する情報が提供されています。 http://sunsolve.sun.com リリース 2.1.1 を正しくインストールするには、Sun SPARC Solaris 2.6 に kernel jumbo パッチ #105181-15 が必要です。 ■ Sun SPARC Solaris で JRE に必要なパッチについては、表 1-14「JRE 1.1.8_10 用の Solaris 2.6（5.6）パッチ」および 1-12 ページの表 1-15「JRE 1.1.8_10 用の Solaris 7（5.7）パッチ」を参照してください。
必須の実行ファイル	■ /usr/ccs/bin ディレクトリに、make、ar、ld および nm の実行ファイルが存在している必要があります。
ウィンドウ・マネージャ	■ インストーラを実行するシステムに X Windows をインストールします。dtwm、twm、olwm など、Sun でサポートされている X Windows サーバーはすべて使用可能です。 リリース 2.1.1 では、キャラクタ・モードのインストールはサポートされていません。1-14 ページの「キャラクタ・モード」を参照してください。

オペレーティング・システム

ご使用のオペレーティング・システムに関する現在の情報を調べるには、表 1-9 の中から、ご使用のプラットフォームに該当するコマンドを入力します。

表 1-9 オペレーティング・システム

プラットフォーム	コマンド
AIX-Based Systems	$ uname -a

Compaq Tru64 UNIX	$ uname -a
	または
	$ string / vmunix | grep

HP 9000 Series HP-UX	$ uname -a
Linux Intel	$ uname -a
Solaris Intel	$ uname -a
Sun SPARC Solaris	$ uname -a

オペレーティング・システムのパッチ

インストール済みのオペレーティング・システムのパッチを調べるには、表 1-10 の中から、ご使用のプラットフォームに該当するコマンドを入力します。

表 1-10 オペレーティング・システムのパッチ

プラットフォーム	コマンド

AIX-Based Systems	`$ instfix -a`
	特定のパッチがインストールされているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。
	`$ instfix -ivk APAR_number`
	インストールされているオペレーティング・システム・ファイルセットを調べるには、次のコマンドを入力します。
	`$ lslpp -1 [fileset_name]`

Compaq Tru64 UNIX	`$ dupatch`
Linux Intel	`$ showrev -p`
Solaris Intel	`$ showrev -p`
Sun SPARC Solaris	`$ showrev -p`

オペレーティング・システム・パッケージ

インストール済みのオペレーティング・システム・パッケージを調べるには、表 1-11 の中から、ご使用のプラットフォームに該当するコマンドを入力します。

表 1-11 オペレーティング・システム・パッケージ

プラットフォーム	コマンド
Compaq Tru64 UNIX	`$ setld -i | grep installed`
HP 9000 Series HP-UX	`$ swlist -i[package_name]` `swlist -i` と入力すると、インストール済みのパッケージがすべてリスト表示されます。
Linux Intel	`rpm -q[package.name]`
Solaris Intel	`$ pkginfo -i [package_name]` `pkginfo -i` と入力すると、インストール済みのパッケージがすべてリスト表示されます。
Sun SPARC Solaris	`$ pkginfo -i [package_name]` `pkginfo -i` と入力すると、インストール済みのパッケージがすべてリスト表示されます。

ウィンドウ・マネージャ

ご使用のローカル・システムで X Windows システムが正しく動作しているかどうかを調べるには、表 1-12 に示されているコマンドを入力します。

表 1-12 ウィンドウ・マネージャ

プラットフォーム	コマンド
すべてのプラットフォーム	`$ xclock` 時計が画面に表示されない場合、X Windows は正しく設定されていません。X Windows の設定手順は、2-12 ページの「DISPLAY」を参照してください。

必須の実行ファイル

正しいシステム実行ファイルが使用されているかどうかを調べるには、表 1-13 の中から、ご使用のプラットフォームに該当するコマンドを入力します。

表 1-13 必須の実行ファイル

プラットフォーム	コマンド

AIX-Based Systems
Compaq Tru64 UNIX
Linux Intel
Solaris Intel
Sun SPARC Solaris
	`$ /usr/bin/which make`
	`$ /usr/bin/which ar`
	`$ /usr/bin/which ld`
	`$ /usr/bin/which nm`

HP 9000 Series HP-UX	`$ /usr/bin/which make`
	`$ /usr/bin/which ar`
	`$ /usr/bin/which ld`
	`$ /usr/bin/which nm`
	`$ /usr/bin/which cc`

注意： すべてのコマンドで `/usr/ccs/bin` ディレクトリを指定する必要があります。そうしない場合、現在のシェルの PATH 環境変数の始めに `/usr/ccs/bin` を追加します。PATH 変数の設定手順は、2-13 ページの「PATH」を参照してください。

Oracle Internet Directory 固有のその他のインストール要件

Oracle Internet Directory リリース 2.1.1 では、Oracle8*i* Enterprise Edition リリース 8.1.7 の様々なコンポーネントがインストールされている必要があります。キャラクタ・セットが UTF8 で、Oracle Internet Directory 専用のインスタンスが存在する必要があります。これらがインストールされていない場合、Oracle Universal Installer により、Oracle Internet Directory のインストールの一部として必須コンポーネントが自動的にインストールされます。データベース・キャラクタ・セットは、次の SQL コマンドによって調べます。

```
select value from nls_database_parameters
where parameter = 'NLS_CHARACTERSET' ;
```

インストール固有の問題および制限事項

次の問題および制限事項は、AIX-Based Systems、Compaq Tru64 UNIX、HP 9000 Series HP-UX、Linux Intel、Solaris Intel および Sun SPARC Solaris における Oracle Internet Directory のインストールまたは使用に影響する可能性があります。Oracle Internet Directory の使用前に、リリース・ノートをお読みください。

Hummingbird Exceed の使用

Oracle Internet Directory のインストールおよび使用の際に Hummingbird 社の Exceed X Window エミュレータを使用する場合、Microsoft Windows がウィンドウ・マネージャとして機能するよう、ウィンドウ・マネージャを "Native" モードで稼動するように設定してください。

> **関連項目：** ウィンドウ・マネージャの設定手順は、Exceed のドキュメントを参照してください。

新しい ORACLE_HOME

オラクル社では、Oracle Internet Directory リリース 2.1.1 製品を新しい *ORACLE_HOME* にインストールすることをお薦めします。Oracle Internet Directory リリース 2.1.1 を、すでに Oracle 製品が含まれている *ORACLE_HOME* ディレクトリにインストールしないでください。

Oracle リリース 8.1.5 または 8.1.6 製品が含まれている *ORACLE_HOME* に Oracle Internet Directory リリース 2.1.1 をインストールする必要がある場合、新規インストールを開始する前に、Oracle Universal Installer を使用してリリース 8.1.5 または 8.1.6 製品を削除してください。

Java 実行時環境（JRE）

ご使用のプラットフォームの Oracle Internet Directory での動作が保証されている JRE を使用することにより、Oracle Universal Installer などの Oracle Java アプリケーションの実行が可能です。これらのアプリケーションでの実行には、動作が保証されているバージョンの JRE のみ使用可能です。オラクル社のカスタマ・サポート・センター提供のパッチによる変更以外は、この JRE を変更しないでください。

インベントリには複数のバージョンの JRE を含めることが可能で、それぞれを 1 つ以上の製品またはリリースで使用できます。インストーラが初めて実行されたときに `oraInventory` ディレクトリが作成され、システムにインストール済みの製品のインストール情報が記録されます。`oraInventory` の場所は、`/var/opt/oracle/oraInst.loc` で定義されています。

`ORACLE_HOME` 内の製品は、JRE にアクセスする際、`$ORACLE_HOME/JRE` 内のシンボリック・リンクを使用して、インベントリ内の JRE の実際の場所にアクセスします。オラクル社のカスタマ・サポート・センター提供のパッチによる変更以外は、シンボリック・リンクを変更しないでください。

表 1-14 および表 1-15 に示されている Sun SPARC Solaris のパッチは、JRE 1.1.8_10 で必須または推奨されており、次の URL で入手可能です。

`http://sunsolve.sun.com`

表 1-14 JRE 1.1.8_10 用の Solaris 2.6（5.6）パッチ

パッチ ID	説明	必須 / 推奨
106040-11	X Input and Output Method パッチ	必須
105181-15	Kernel パッチ	必須
105284-25	Motif Runtime Library パッチ	推奨
105490-07	Dynamic linker パッチ	推奨
106409-01	Chinese TrueType fonts パッチ（1）	推奨
105633-21	OpenWindows 3.6: Xsun パッチ（1）	推奨
105568-13	Libthread パッチ	推奨
105210-19	LibC パッチ	推奨
105669-07	CDE 1.2: libDTSvc パッチ（dtmail）	推奨

表 1-15 JRE 1.1.8_10 用の Solaris 7（5.7）パッチ

パッチ ID	説明	必須 / 推奨
107636-01	X Input and Output Method パッチ	必須
106980-05	Libthread パッチ	推奨
107607-01	Motif fontlist、fontset、libxm	推奨
107078-10	Open Windows 3.6.1: Xsun パッチ（1）	推奨

表 1-16 JDK 1.2.2 用の Solaris 2.6（5.6）パッチ

パッチ ID	説明	必須 / 推奨
105490-07	Linker パッチ	必須
105568-16	Libthread パッチ	必須
105210-27	Libc パッチ	必須
106040-13	X Input and Output Method パッチ	必須
105633-36	OpenWindows 3.6: Xsun パッチ	必須
106409-01	Fixes the Chinese TrueType fonts	必須
108091-03	SunOS 5.6: ssJDK 1.2.1_03 fails with fatal error in ISO8859-01 Locales	必須
105181-19	Kernel Update (socket close/hang)	推奨
105669-10	CDE 1.2: libDTSvc パッチ（dtmail）	推奨
105284-31	Motif 1.2.7: Runtime Library パッチ	推奨

表 1-17 JDK 1.2.2 用の Solaris 7（5.7）パッチ

パッチ ID	説明	必須 / 推奨
106980-10	Libthread パッチ	必須
107636-03	X Input and Output Method パッチ	必須
107081-11	Motif 1.2.7 and 2.1.1: Runtime library patch for Solaris 7	必須
108376-03	OpenWindows 3.6.1 Xsun パッチ	必須

Solaris Intel システムでは、JRE リリース 1.1.8.10 に、表 1-18 に示されているパッチが必要です。

http://sunsolve.sun.com

表 1-18 JDK 1.2.2 用の Solaris Intel パッチ

パッチ ID	説明	必須 / 推奨
106981-10	Libthread パッチ	必須
107637-03	X Input and Output Method パッチ	必須
107082-11	Motif 1.2.7_x86 and 2.1.1_x86: Runtime library patch for Solaris 7	必須
108377-03	OpenWindows 3.6.1_x86: Xsun パッチ	必須

キャラクタ・モード

キャラクタ・モードでのインストールは実行できません。ただし、Oracle 製品の非対話モードのインストールを実行するよう Oracle Universal Installer を設定可能です。Oracle Universal Installer は、非対話モードで、システムの X Windows コンソールから直接実行したり、リモート・システム上の X 端末または PC X 端末経由で実行可能です。Oracle 製品の非対話モードのインストールの詳細は、3-15 ページの「非対話モードの（サイレント）インストールおよび設定」を参照してください。

ファイル・システム

Oracle8*i* Server では、ファイルがディスクに対して書き込まれたことを検証できる必要があります。オラクル社では、このような検証をサポートしていないファイル・システムをサポートしていません。

Solaris 2.3、2.4 および 2.5

オラクル社では、Solaris 2.3、2.4 および 2.5 での Oracle Internet Directory リリース 2.1.1 の使用はサポートしていません。Solaris 2.6 または Solaris 7 を使用する必要があります。オペレーティング・システムおよびパッチ・レベルの要件は、1-4 ページの表 1-3 を参照してください。

2

インストール前の作業

ご使用のシステムが第 1 章「システム要件」の要件を満たしていることを確認した後、この章を参照して Oracle Internet Directory のインストール用にシステムを準備してください。

- UNIX システムの設定
- セットアップ作業について
  - root ユーザーで実行するセットアップ作業
  - oracle ユーザーで実行するセットアップ作業
  - Oracle Internet Directory のセットアップ作業

UNIX システムの設定

表 2-1 から表 2-5 に、Compaq Tru64 UNIX、HP 9000 Series HP-UX、Linux Intel、Sun SPARC Solaris および Solaris Intel に Oracle Internet Directory をインストールするための要件のサマリーを示します。ご使用のシステムがこれらの要件を満たしていない場合、要件に合うよう、2-7 ページの作業を実行してシステムを設定してください。

表 2-1 Compaq Tru64 UNIX 固有の設定

システム要素	Oracle Internet Directory の要件	
UNIX カーネル・パラメータ：		
共有メモリー	SHMMAX	2139095040（2GB ～ 8MB） この設定は、Oracle Internet Directory またはオペレーティング・システムで必要な、または使用される共有メモリーのサイズには影響しません。最大許容サイズを示すためにのみ使用されます。また、この設定は、オペレーティング・システムのカーネル・リソースにも影響しません。
	SHMMIN	1
	SHMMNI	100
	SHMSEG	32

注意：前述のカーネル・パラメータが現在ご使用の値より小さい場合、現在の値をそのままご使用ください。これらは、Oracle Internet Directory のみの要件です。他に共有メモリーを使用するプログラムが存在する場合、それに合せて値を調整する必要があります。現在および将来のデータベース要件の計画を立てる際、カーネルの変更を反映させるにはシステムを再起動する必要があることを考慮してください。

表 2-2 HP 9000 Series HP-UX 固有の設定

システム要素	Oracle Internet Directory の要件	
UNIX カーネル・パラメータ：	System Administrator's Menu（SAM）を使用して、HP-UX カーネルに最小推奨値を設定します。	
共有メモリー	SHMMAX	1GB この設定は、Oracle Internet Directory またはオペレーティング・システムで必要な、または使用される共有メモリーのサイズには影響しません。最大許容サイズを示すためにのみ使用されます。また、この設定は、オペレーティング・システムのカーネル・リソースにも影響しません。
	SHMMIN	1
	SHMMNI	100
	SHMSEG	10
セマフォ	SEMMNI	70 システム内のセマフォ設定識別子の数を設定します。SEMMNI により、一度に作成可能なセマフォ・セットの数が決定されます。 PROCESSES パラメータは、$ORACLE_HOME/dbs ディレクトリ内の各 init*sid*.ora ファイルに含まれています。Oracle Database Configuration Assistant によって作成される事前設定済みデータベースの PROCESSES のデフォルト値は 50 です。
	SEMMNS	200 システム内のセマフォ数を 200 に設定します。SEMMNS のデフォルト値は 128 ですが、この値は、ほとんどの場合、Oracle では小さすぎます。
スレッド	MAX_THREAD_PROC	256 以上 プロセス当たりのスレッドの最大数を 256 以上に設定します。MAX_THREAD_PROC のデフォルト値は 64 ですが、この値は、ほとんどの場合、Oracle では小さすぎます。

注意 : 前述のカーネル・パラメータが現在ご使用の値より小さい場合、現在の値をそのままご使用ください。他に共有メモリーおよびセマフォを使用するプログラムが存在する場合、それに合せて値を調整する必要があります。現在および将来のデータベース要件の計画を立てる際、カーネルの変更を反映させるにはシステムを再起動する必要があることを考慮してください。

表 2-3 Linux Intel 固有の設定

システム要素	Oracle Internet Directory の要件	
UNIX カーネル・パラメータ :		
共有メモリー	SHMMAX	0.5*(マシンに存在する物理メモリー) これ以外の制限事項は、ご使用のシステムを確認してください。 この設定は、Oracle Internet Directory またはオペレーティング・システムで必要な、または使用される共有メモリーのサイズには影響しません。最大許容サイズを示すためにのみ使用されます。また、この設定は、オペレーティング・システムのカーネル・リソースにも影響しません。
	SHMMIN	1
	SHMMNI	100
	SHMSEG	10
セマフォ	SEMMNI	100
	SEMMSL	システム上の Oracle データベースの PROCESSES パラメータのうち最大のものに 10 を加えた値を設定します。 PROCESSES パラメータは、$ORACLE_HOME/dbs ディレクトリ内の各 init*sid*.ora ファイルに含まれています。Oracle Database Configuration Assistant によって作成される事前設定済みデータベースの PROCESSES のデフォルト値は 50 です。
	SEMMNS	各 Oracle データベースの PROCESSES パラメータの合計に、最大の PROCESSES パラメータの値をもう一度加え、さらにデータベース数× 10 を加えた合計の値を設定します。この計算式の例は、2-7 ページの「Oracle8i 用の UNIX カーネルの設定」を参照してください。
	SEMOPM	100
	SEMVMX	32767

注意 : 前述のカーネル・パラメータが現在ご使用の値より小さい場合、現在の値をそのままご使用ください。他に共有メモリーおよびセマフォを使用するプログラムが存在する場合、それに合せて値を調整する必要があります。現在および将来のデータベース要件の計画を立てる際、カーネルの変更を反映させるにはシステムを再起動する必要があることを考慮してください。

表 2-4 Sun SPARC Solaris 固有の設定

システム要素	Oracle Internet Directory の要件	
UNIX カーネル・パラメータ： 共有メモリー	SHMMAX	4294967295 この設定は、Oracle Internet Directory またはオペレーティング・システムで必要な、または使用される共有メモリーのサイズには影響しません。最大許容サイズを示すためにのみ使用されます。また、この設定は、オペレーティング・システムのカーネル・リソースにも影響しません。
	SHMMIN	1
	SHMMNI	100
	SHMSEG	10
セマフォ	SEMMNI	100
	SEMMSL	システム上の Oracle データベースの PROCESSES パラメータのうち最大のものに 10 を加えた値を設定します。 PROCESSES パラメータは、$ORACLE_HOME/dbs ディレクトリ内の各 init*sid*.ora ファイルに含まれています。Oracle Database Configuration Assistant によって作成される事前設定済みデータベースの PROCESSES のデフォルト値は 50 です。
	SEMMNS	各 Oracle データベースの PROCESSES パラメータの合計に、最大の PROCESSES パラメータの値をもう一度加え、さらにデータベース数 × 10 を加えた合計の値を設定します。この計算式の例は、2-7 ページの「Oracle8i 用の UNIX カーネルの設定」を参照してください。
	SEMOPM	100
	SEMVMX	32767

注意：前述のカーネル・パラメータが現在ご使用の値より小さい場合、現在の値をそのままご使用ください。他に共有メモリーおよびセマフォを使用するプログラムが存在する場合、それに合せて値を調整する必要があります。現在および将来のデータベース要件の計画を立てる際、カーネルの変更を反映させるにはシステムを再起動する必要があることを考慮してください。

表 2-5 Solaris Intel 固有の設定

システム要素	Oracle Internet Directory の要件	
UNIX カーネル・パラメータ :		
共有メモリー	SHMMAX	0.5*(マシンに存在する物理メモリー) この設定は、Oracle Internet Directory またはオペレーティング・システムで必要な、または使用される共有メモリーのサイズには影響しません。最大許容サイズを示すためにのみ使用されます。また、この設定は、オペレーティング・システムのカーネル・リソースにも影響しません。
	SHMMIN	1
	SHMMNI	100
	SHMSEG	10
セマフォ	SEMMNI	100
	SEMMSL	システム上の Oracle データベースの PROCESSES パラメータのうち最大のものに 10 を加えた値を設定します。 PROCESSES パラメータは、$ORACLE_HOME/dbs ディレクトリ内の各 init*sid*.ora ファイルに含まれています。Oracle Database Configuration Assistant によって作成される事前設定済みデータベースの PROCESSES のデフォルト値は 50 です。
	SEMMNS	各 Oracle データベースの PROCESSES パラメータの合計に、最大の PROCESSES パラメータの値をもう一度加え、さらにデータベース数 × 10 を加えた合計の値を設定します。この計算式の例は、2-7 ページの「Oracle8i 用の UNIX カーネルの設定」を参照してください。
	SEMOPM	100
	SEMMNI	100
	SSEMMNS	各 Oracle データベースの PROCESSES パラメータの合計に、最大の PROCESSES パラメータの値をもう一度加え、さらにデータベース数× 10 を加えた合計の値を設定します。この計算式の例は、2-7 ページの「Oracle8i 用の UNIX カーネルの設定」を参照してください。

セットアップ作業について

次のインストール前のセットアップ作業では、システムを設定し、Oracle8*i* の実行に必要なアカウント、グループ、変数および許可をセットアップします。これらの作業がインストール前に実行されていない場合、インストール中に、これらのセットアップ作業の多くを行うスクリプト・プログラム orainstRoot.sh を root で実行するオプションが示されます。ただし、orainstRoot.sh を実行した場合、ご使用のシステムや要件に合せた最適の環境が得られるとはかぎりません。オラクル社では、これらのステップを手動で実行することをお薦めします。

root ユーザーで実行するセットアップ作業

root ユーザーでログインし、次の作業を実行して Oracle8*i* 用に環境のセットアップを行います。

- Oracle8i 用の UNIX カーネルの設定
- マウント・ポイントの作成
- データベース管理者の UNIX グループの作成
- Oracle Universal Installer のインベントリ用の UNIX グループの作成
- Oracle ソフトウェアを所有する UNIX アカウントの作成

注意： これらのセットアップ作業に加え、/var/opt/oracle/oraInst.loc ファイルが存在しない場合、インストールの開始前にも root 権限が必要になります。また、インストールの終わりの方で、root.sh スクリプトを実行するために root 権限が必要になります。

Oracle8*i* 用の UNIX カーネルの設定

Oracle8*i* のシステム・グローバル領域（SGA）構造に対応できるよう、UNIX カーネルの Interprocess Communication（IPC）パラメータを設定します。SGA に対応できるだけの十分な共有メモリーがシステムに存在しない場合、データベースを起動できません。

1. ipcs コマンドを使用して、システムの現在の共有メモリー・セグメント、セマフォ・セグメント、その識別番号および所有者のリストを取得します。

   AIX-Based Systems、Compaq Tru64 UNIX、HP 9000 Series HP-UX、Linux Intel、Solaris Intel および Sun SPARC Solaris では共有メモリーは動的にロードされるため、ipcs の実行時に、共有メモリー機能がシステムに存在しないというメッセージが表示される場合があります。共有メモリー・ドライバは、Oracle8*i* インスタンスの開始後にロードされます。システムに十分な共有メモリーが設定されているかどうかを確認するには、/etc/system ファイルを調べます。

2. ご使用のプラットフォームに対応するカーネル・パラメータを設定します。表 2-1 から表 2-5 で、カーネル・パラメータについて説明します。

   - 共有メモリー・セグメントの最大サイズ（SHMMAX）
   - 共有メモリー・セグメントの最小サイズ（SHMMIN）
   - システム内の共有メモリー識別子の最大数（SHMMNI）
   - ユーザー・プロセスが連結可能な共有メモリー・セグメントの最大数（SHMSEG）
   - システム内のセマフォ識別子の最大数（SEMMNI）
   - セット内のセマフォの最大数（SEMMSL）
   - システム内のセマフォの最大数（SEMMNS）
   - semop コール当たりの操作の最大数（SEMOPM）
   - セマフォの最大値（SEMVMX）

   共有メモリーの許容合計サイズは、次の計算式によって算出します。

   ```
   SHMMAX * SHMSEG
   ```

   各 Oracle データベースの PROCESSES パラメータの合計に、最大の PROCESSES パラメータの値をもう一度加え、さらにデータベース数× 10 を加えた合計の値を SEMMNS に設定します。たとえば、あるシステムに 3 つの Oracle インスタンスが存在し、それぞれの initsid.ora ファイル内の PROCESSES パラメータに次の値が設定されているとします。

   ```
   ORACLE_SID=A, PROCESSES=100
   ORACLE_SID=B, PROCESSES=100
   ORACLE_SID=C, PROCESSES=200
   ```

   SEMMNS の値は、次のようにして計算されます。

   SEMMNS = [(A=100) + (B=100)] + [(C=200) * 2] + [(インスタンス数 =3) * 10] = 630

   オペレーティング・システムに対してパラメータの値が大きすぎる場合、マシンは起動できません。パラメータの限界値については、UNIX のシステム管理ドキュメントを参照してください。

   次に、UNIX カーネルを最小推奨値に設定する場合に /etc/system ファイルに追加する行の例を示します。

   ```
   set shmsys:shminfo_shmmax=4294967295
   set shmsys:shminfo_shmmin=1
   set shmsys:shminfo_shmmni=100
   set shmsys:shminfo_shmseg=10
   set semsys:seminfo_semmni=100
   set semsys:seminfo_semmsl=100
   ```

```
set semsys:seminfo_semmns=200
set semsys:seminfo_semopm=100
set semsys:seminfo_semvmx=32767
```

3. カーネル、共有メモリーまたはセマフォ・パラメータを変更した場合、システムを再起動します。

マウント・ポイントの作成

Oracle8*i* では、最低 2 つのマウント・ポイントが必要です。

- ソフトウェア用に 1 つ
- データベース・ファイル用に最低 1 つ

データベース管理者の UNIX グループの作成

インストール中に、2 つの Oracle ロールが作成されます。

- SYSDBA
- SYSOPER

データベース管理者は、対応する UNIX グループ内のメンバーシップの特権としてこれらのロールを付与されます。Oracle8*i* のドキュメントでは、これらの UNIX グループは、`osdba` および `osoper` グループと呼ばれます。*`oracle`* ユーザーとしてログインし、Oracle Universal Installer を起動する前に、これらのロールのグループを作成してください。これらのロールは、2 つの異なる UNIX グループに割り当てることも、1 つのグループに割り当てることも可能です。

`admintool` または `groupadd` ユーティリティを使用して、*`dba`* という名前（または任意の名前）のグループを作成します。SYSOPER ロールを別のグループに割り当てる場合、そのグループも作成します。

Oracle Universal Installer では、デフォルトで、UNIX グループ `dba` のメンバーに、Oracle SYSDBA および SYSOPER 権限の両方を付与します。Oracle8*i* のカスタム・インストールを実行している場合、または *`oracle`* ユーザーが `dba` というグループのメンバーではない場合、Oracle Universal Installer により、それらのロール用に作成したグループを入力するようプロンプトが表示されます。

Oracle Universal Installer のインベントリ用の UNIX グループの作成

`admintool` または `groupadd` ユーティリティを使用して、*`oinstall`* という名前のグループを作成します。*`oinstall`* グループは、Oracle Universal Installer の `oraInventory` ディレクトリの所有者となります。インストールを実行する *`oracle`* ユーザー・アカウントのプライマリ・グループは、*`oinstall`* グループである必要があります。

Oracle ソフトウェアを所有する UNIX アカウントの作成

oracle アカウントは、インストール後に Oracle8*i* ソフトウェアを所有する UNIX ユーザー・アカウントです。このユーザー・アカウントで Oracle Universal Installer を実行します。

admintool または useradd ユーティリティを使用して、次のプロパティを持つ *oracle* アカウントを作成します。

表 2-6 *oracle* アカウントのプロパティ

プロパティ	説明
ログイン名	任意の名前。このマニュアルでは、*oracle* アカウントと呼ばれます。
プライマリ GID	*oinstall* グループ
セカンダリ GID	*dba* グループ
ホーム・ディレクトリ	他のユーザーのホーム・ディレクトリと一貫性のあるホーム・ディレクトリを選択します。*oracle* アカウントのホーム・ディレクトリは、*ORACLE_HOME* ディレクトリと同じである必要はありません。
ログイン・シェル	デフォルトのシェルは /usr/bin/sh、/usr/bin/csh または /usr/bin/ksh ですが、このマニュアルの例では、Bourne シェルを使用しています（/usr/bin/sh）。

注意： *oracle* アカウントは、Oracle ソフトウェアのインストールおよびメンテナンスにのみ使用してください。Oracle8*i* Server に関係のない用途では使用しないでください。root を *oracle* アカウントとして使用しないでください。

1 つのシステム上に複数の *ORACLE_HOME* が存在するサイトでは、Oracle ソフトウェアのインストールに、同じ *oracle* アカウントを使用することも、別のアカウントを使用することも可能です。いずれの *oracle* アカウントも、プライマリ・グループが oinstall である必要があります。

oracle ユーザーで実行するセットアップ作業

oracle アカウントにログインし、必要に応じて次の作業を実行します。

- 作業 1: ファイルの作成許可の設定
- 作業 2: 環境変数の設定
- 作業 3: 現在のセッションの環境の更新

作業 1: ファイルの作成許可の設定

oracle アカウントの umask を 022 に設定し、group および other は、インストールされたファイルに対する読込みおよび実行許可のみ保有し、書込み許可は保有していないことを確認します。

1. umask コマンドを入力し、現在の設定を調べます。
2. umask コマンドから 022 が返されなかった場合、*oracle* アカウントの .profile または .login ファイルでこれを設定し、次のコマンドを実行します。

```
$ umask 022
```

作業 2: 環境変数の設定

Oracle Universal Installer を起動する前に、DISPLAY と PATH 環境変数、およびその他必要な変数を設定します。表 2-7「環境変数のサマリー」に、この項で説明されている変数の簡単なサマリーを示します。変数の正しい設定手順は、この項の各変数のエントリを参照してください。

> **注意：** Oracle Server がすでにご使用のシステムに存在する場合、既存の設定が新しい環境用に選択した設定に影響する可能性があります。

表 2-7 環境変数のサマリー

変数	説明	必須
DISPLAY	Oracle Universal Installer が表示されるシステムの名前、サーバー番号およびスクリーン番号。	はい
PATH	実行可能ファイルのシェル検索パス。	はい
ORACLE_BASE	Oracle ソフトウェアおよび管理ファイル構造の最上位ディレクトリ。	いいえ
ORACLE_HOME	特定のリリースの Oracle ソフトウェアが含まれているディレクトリ。	いいえ
NLS_LANG	インストール時に使用する言語、地域およびキャラクタ・セット。	いいえ

表 2-7 環境変数のサマリー（続き）

変数	説明	必須
ORACLE_SID	インストール時に使用する Oracle サーバー・インスタンスの識別子。	いいえ

DISPLAY

Oracle Universal Installer を実行するシステムの DISPLAY に、システム名または IP アドレス、X サーバー、およびワークステーションで使用されているスクリーンを設定します。ソフトウェアのインストール先のシステムの X Windows コンソールからインストールを実行する場合を除き、ソフトウェアのインストール先のシステムのホスト名または IP アドレスを使用しないでください。リモート・システムからインストールする場合、ワークステーションのマシン名または IP を使用してください。X サーバーおよびスクリーンの設定内容が不明な場合、両方とも 0（ゼロ）を使用してください。

Oracle Universal Installer の起動時に「Failed to connect to server」、「Connection refused by server」または「Can't open display」のような Xlib エラーが表示された場合、次の Bourne/Korn シェルまたは C シェル・コマンドを X ワークステーション上で実行してください。

Bourne または Korn シェルの場合

Oracle データベースのインストール先サーバーで、次のように入力します。

```
$ DISPLAY=workstation_name:0.0
$ export DISPLAY
```

ご使用のワークステーションでセッション中に、次のように入力します。

```
$ xhost +server_name
```

C シェルの場合

Oracle データベースのインストール先サーバーで、次のように入力します。

```
% setenv DISPLAY workstation_name:0.0
```

ご使用のワークステーションでセッション中に、次のように入力します。

```
% xhost +server_name
```

PC X サーバーを使用している場合、リモート X クライアントが接続可能なように PC X サーバーを設定する方法について、PC X サーバーのドキュメントを参照してください。

DISPLAY 変数が正しく設定されていることを確認します。

PATH
シェルの検索パスに次のパスを含めます。

- $ORACLE_HOME/bin、/usr/bin、/etc、/usr/ccs/bin、/usr/openwin/bin
- ローカル bin ディレクトリである /usr/local/bin（存在する場合）

> **注意：** 検索パスに /usr/ucb を設定する必要がある場合、PATH 設定内で必ず /usr/ccs/bin より後に設定してください。

ORACLE_BASE
ORACLE_BASE により、Oracle ソフトウェアおよび管理ファイル構造の最上位ディレクトリを指定します。OFA 設定で推奨する値は *software_mount_point*/app/oracle です。たとえば、/u01/app/oracle のようになります。OFA 準拠システムを使用していない場合、オラクル社では、ORACLE_BASE を設定することをお薦めします。

ORACLE_HOME
ORACLE_HOME により、特定のリリースの Oracle ソフトウェアが含まれているディレクトリを指定します。OFA の推奨値は、$ORACLE_BASE/product/*release* です。
たとえば、次のようになります。
/u01/app/oracle/product/8.1.7

ORACLE_HOME が指しているディレクトリに、Oracle8*i* リリース 1（8.1.5）またはリリース 2（8.1.6）よりも前の Oracle ソフトウェアが含まれていないことを確認してください。

NLS_LANG
Oracle Internet Directory の場合、データベースの NLS_LANG を utf8 に設定します。

Oracle では、クライアントとサーバーが異なるキャラクタ・セットを使用するクライアント / サーバー環境をサポートしています。クライアントが使用するキャラクタ・セットは、クライアント・セッションの NLS_LANG パラメータの値によって定義されます。サーバーが使用するキャラクタ・セットは、そのデータベースのキャラクタ・セットです。これらのキャラクタ・セットが異なる場合、キャラクタ・セット間のデータ変換は自動的に行われます。

> **関連項目：** National Language Support 機能の詳細は、『Oracle8*i* 管理者ガイド』を参照してください。有効なキャラクタ・セットの完全なリストは、『Oracle8*i* NLS ガイド』を参照してください。

ORACLE_SID
インストール中にデータベースを作成する場合、ORACLE_SID に Oracle サーバー・インスタンス識別子（このインストレーション・ガイドでは *sid* と呼ばれる）の値を設定するオプションを選択可能です。インストール中にデータベースを作成するよう選択した場合、インストーラにより、この値を確認するようプロンプトが表示されます。

作業 3: 現在のセッションの環境の更新

テキスト・エディタを使用して、「作業 2: 環境変数の設定」に示されている環境変数の設定を、*oracle* アカウントの .profile または .login ファイルに追加します。これらの初期化ファイルの編集後、適切なシェル・コマンドを使用して、インストールを開始する前に現在のシェル・セッションの環境をすばやく更新できます。

Bourne または Korn シェルの場合

```
$ ../.profile
```

C シェルの場合

```
% source .login
```

Oracle Internet Directory のセットアップ作業

オラクル社では、最適なディレクトリ・パフォーマンスのために、Oracle Internet Directory を他の Oracle ソフトウェアとは別のシステムにインストールすることをお薦めします。

Oracle8*i* リリース 8.1.7 がまだご使用のシステムにインストールされていない場合、Oracle Universal Installer により、Oracle Internet Directory とともにインストールされます。

これらのステップは、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の事前作業の章に示されているステップに加えて実行する必要があります。

ご使用のシステムに Oracle8*i* リリース 8.1.7 がすでにインストールされている場合、次の点を確認してください。

- Oracle8*i* サーバーが稼動しているか。
- internal ユーザーとしてパスワードなしでデータベースに接続できるか。たとえば、次のようになります。

  ```
  $ sqlplus internal
  ```

  パスワードなしで internal として接続できない場合、internal アカウントでパスワードを必要としない設定の手順について、『Oracle8*i* 管理者ガイド』を参照してください。
- データベースへの接続を処理している Net8 リスナーが稼動しているか。基本リスナー・ステータス情報を表示するには、次のように入力します。

  ```
  $ lsnrctl status [listener_name]
  ```

  リスナー名がデフォルトの listener 以外の名前である場合、*listener_name* フィールドは必須です。

3

インストール

この章では、Oracle Universal Installer の起動方法と、Oracle Internet Directory のインストール手順について説明します。インストールを開始する前に、第 1 章「システム要件」および第 2 章「インストール前の作業」の作業を確認し、完了してください。

- Oracle Universal Installer
- 非対話モードの（サイレント）インストールおよび設定

Oracle Universal Installer

Oracle Universal Installer を起動するには、次の作業を実行します。

- Oracle Internet Directory CD-ROM のマウント
- Oracle Universal Installer（OUI）の起動
- インストールの実行

注意： Oracle Installer の以前のバージョン（リリース 7.x および 8.0.x 付属のインストーラ）を使用したリリース 8.1 の Oracle ホーム・ディレクトリへのコンポーネントのインストールはサポートされていません。同様に、リリース 8.1.7 のコンポーネントは、リリース 7.x、8.0.x、8.1.3 または 8.1.4 の Oracle ホームにインストールできません。

Oracle Internet Directory CD-ROM のマウント

Oracle Internet Directory の CD-ROM は、RockRidge 拡張 ISO 9660 形式です。

Volume Management ソフトウェア（Solaris Intel および Sun SPARC Solaris にデフォルトで付属）を使用している場合、ディスク・ドライブに CD-ROM を挿入すると自動的に `/cdrom/`*`cdrom_mount_point_directory`* にマウントされます。3-5 ページの「Oracle Universal Installer（OUI）の起動」に進んでください。

Volume Management ソフトウェアを使用していない場合、CD-ROM を手動でマウントする必要があります。CD-ROM を手動でマウント / アンマウントする場合は、`root` 権限が必要です。CD-ROM をドライブから取り出す前に、`umount` コマンドを使用して CD-ROM をアンマウントしてください。

AIX-Based Systems、Compaq Tru64 UNIX、Linux Intel、Solaris Intel および Sun SPARC Solaris での CD-ROM のマウント

1. CD-ROM ドライブに Oracle Internet Directory の CD-ROM を挿入します。
2. `root` ユーザーでログインし、CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリを作成します。

   ```
   $ su root
   # mkdir cdrom_mount_point_directory
   ```

3. CD-ROM ドライブをマウント・ポイント・ディレクトリにマウントして、`root` アカウントを終了します。

   AIX-Based Systems、Linux Intel および Solaris Intel の場合、次のようにします。

   ```
   # mount options device_name cdrom_mount_point_directory
   # exit
   ```

Compaq Tru64 UNIX の場合、次のようにします。

```
# mount -t cdfs -r -o nodefperm, noversion, rrip device_name
cdrom_mount_point_directory
# exit
```

これらのオプションの意味は、次のとおりです。

`-t cdfs` = ISO 9660 CD

`-r` = CD を読込み専用でマウント

`-o` = 次のオプションを含める

`nodefperm` = デフォルトではなく CD に記録されているファイル許可を使用

`noversion` = ISO バージョン番号を表示しない

`rrip` = Rockridge 拡張子を使用

例 3-1 CD-ROM のマウント

次の例で、AIX-Based Systems、Compaq Tru64 UNIX、Linux Intel、Solaris Intel および Sun SPARC Solaris での手動での CD-ROM のマウントを示します。

AIX-Based Systems の場合の入力内容

```
$ su root
# mkdir /cdrom
# chmod 777 /cdrom
# mount -rv cdrfs /dev /cd0 /cdrom
# exit
```

rootpre.sh スクリプトの実行

次のようにして、すべての稼動中のデータベースをシャットダウンし、root で `rootpre.sh` を実行します。

1. `oracle` ユーザーで、マシン上のすべてのデータベースをシャットダウンします。
2. `root` ユーザーでログインし、CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリに移動します。

   ```
   $ su root
   # cdrom_mount_point_directory
   ```

3. Oracle Parallel Server Option をインストールする前に、すべてのノードで `rootpre.sh` を実行します。

```
$ su root
# cd /cdrom
# ./rootpre.sh
# exit
```

Compaq Tru64 UNIX の場合の入力内容

```
$ su root
# mkdir /cdrom
# mount -t cdfs -r -o nodefperm, noversion, rrip /dev/rz4c /cdrom
# exit
```

Linux Intel の場合の入力内容

```
$ su root
# mkdir /cdrom
# mount -t iso9660 /dev/cdrom /cdrom
```

Solaris Intel の場合の入力内容

```
$ /etc /mount -F hsfs -r /dev/dsk/c0t6d0p0 /cdrom
```

Sun SPARC Solaris の場合の入力内容

```
$ su root
# mkdir /cdrom
# mount -r -F hsfs device_name /cdrom
# exit
```

HP 9000 Series HP-UX での CD-ROM のマウント

Oracle Internet Directory の CD-ROM は、RockRidge 拡張 ISO 9660 形式です。

注意： Oracle Internet Directory リリース 2.1.1 のディスクのマウントの詳細は、ご使用のプラットフォーム用のリリース・ノートを参照してください。

CD-ROM を手動でマウント / アンマウントする場合は、root 権限が必要です。CD-ROM をドライブから取り出す前に、必ず umount コマンドを使用して CD-ROM をアンマウントしてください。

1. システム・エディタを使用して、次の行を /etc/pfs_fstab ファイルに追加します。

構文

```
<device_file> <mount_point> <filesystem_type> <translation_method>
```

最初のエントリは CD-ROM デバイス・ファイルで、2 番目はマウント・ポイントです。3 番目は、マウントする CD-ROM が RockRidge 拡張 ISO 9660 形式であることを示します。

例
```
/dev/dsk/c5t2d0 /SD_CDROM pfs-rrip xlat=unix 1 0
```

2. root でログインします。
3. 次のコマンドを入力します。

   ```
   $ nohup /usr/sbin/pfs_mountd &
   ```

4. 次のコマンドを入力します。

   ```
   $ nohup /usr/sbin/pfsd &
   ```

5. CD-ROM をトレーに挿入し、次のコマンドを実行して CD-ROM をマウントします。

   ```
   $ /usr/sbin/pfs_mount /SD_CDROM
   ```

6. root ユーザーからログアウトします。

   ```
   # exit
   ```

   /SD_CDROM に移動すると、CD-ROM 内のディレクトリおよびファイルが小文字でリスト表示されます。マウントされた CD-ROM は、読込み専用のファイル・システムとして表示されます。

Oracle Universal Installer（OUI）の起動

注意： Oracle Universal Installer を root ユーザーで実行しないでください。

Oracle Universal Installer を起動するには、次のステップを実行します。

1. *oracle* ユーザーでログインします。
2. CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリに移動します。

   cd *cdrom_mount_point_directory*

3. ./runInstaller と入力して、Oracle Universal Installer を起動します。

注意： Oracle Universal Installer（OUI）を使用して、Oracle 製品を非対話モードでインストールできます。オプションで、OUI を画面に何も表示されないサイレント・モードに設定することが可能です。Oracle Universal Installer の非対話モードの使用方法は、3-15 ページの「非対話モードの（サイレント）インストールおよび設定」を参照してください。

警告： Oracle Universal Installer では、自動的に Oracle バージョンの Java 実行時環境（JRE）がインストールされます。Oracle Universal Installer および一部の Oracle Assistant の実行に、このバージョンが必要です。オラクル社のカスタマ・サポート・センター提供のパッチによる変更以外は、この JRE を変更しないでください。

インストールの実行

次に、Oracle Universal Installer の実行手順を示します。

1. Oracle Universal Installer を起動します。「Welcome」画面が表示されます。
2. 「Next」をクリックします。

   「File Locations」画面が表示されます。「Source」フィールドのテキストを変更しないでください。これは、インストールするファイルの場所です。
3. 「Destination」フィールドに、Oracle Internet Directory のインストール先の *ORACLE_HOME* ディレクトリのパスを入力します。デフォルトの場所は、Oracle Universal Installer の起動前に ORACLE_HOME 環境変数を設定している場合、その値です。

   選択したインストール先ディレクトリに、Oracle Internet Directory の以前のリリースが存在する場合、ソフトウェアの以前のバージョンがリリース 2.1.1 にアップグレードされます。オラクル社では、リリース 2.1.1 製品を新しい ORACLE_HOME にインストールすることをお薦めします。
4. 「Next」をクリックします。

   Oracle Internet Directory が現在のシステムに初めてインストールされる場合、「UNIX Group Name」画面が表示されます。初めてのインストールではない場合、ステップ 6 に進みます。

   「UNIX Group Name」フィールドで、システム内の Oracle ソフトウェアの更新権限を持つグループを指定します。このグループには、通常、2-9 ページの「Oracle Universal Installer のインベントリ用の UNIX グループの作成」で作成した `oinstall` グループを指定します。
5. 「Next」をクリックします。

   `/var/opt/oracle/` が存在しない場合、または *oracle* ユーザーによる書込みが許可されていない場合、Oracle Universal Installer によってウィンドウが表示され、別の端末ウィンドウで `/tmp/OraInstall/orainstRoot.sh` を `root` ユーザーとして実行するよう、プロンプトが表示されます。`orainstRoot.sh` を実行した後、「Retry」をクリックしてインストールを継続します。

注意： インストール前の作業ステップが完了されていない場合のみ、orainstRoot.sh インストーラ・ウィンドウが表示されます。orainstRoot.sh スクリプトの実行を選択した場合、oraInventory ファイルおよびその他 Oracle によって使用されるファイルは、Oracle からの書込みを可能にするために *ORACLE_HOME* に書き込まれます。この設定は、ご使用のシステムおよび要件に適さない可能性があります。オラクル社では、第 2 章「インストール前の作業」で説明されているステップの実行をお薦めします。

6. 「Available Products」画面には、2 つのオプションが示されます。
   - Install Oracle Internet Directory Client 2.1.1.0.0
   - Install Oracle Internet Directory 2.1.1.0.0

   サーバーのインストールを選択した場合、「Installation Types」画面が表示されます。
7. インストール・タイプを「Typical」または「Custom」から選択し、「Next」を選択します。
8. カスタム（Custom）インストールを選択した場合、3-12 ページの「Oracle Internet Directory のアップグレード」に進んでください。

   標準（Typical）インストールを選択した場合、表示される画面に従って、次のステップを実行します。

Oracle8*i* データベースのリリース	表示画面	参照先
リリース 8.1.7 はすでにコンピュータにインストール済みだが、Oracle Internet Directory リリース 2.1.1 はインストールされていない	「Using an existing instance」画面が表示され、使用する SID のプロンプトが表示されます。他の Oracle8*i* データベースはインストールされません。	3-8 ページの「標準インストールの実行」のステップ 1
リリース 8.1.5、8.1.6 または 8.1.7、および Oracle Internet Directory リリース 2.0.4、2.0.6 または 2.1 はコンピュータにインストールされていない	「Database Identification」画面が表示され、Oracle8*i* データベース リリース 8.1.7 が、Oracle Internet Directory リリース 2.1.1 と同じホームに自動的にインストールされます。	3-8 ページの「標準インストールの実行」のステップ 3

Oracle8*i* データベースのリリース	表示画面	参照先
リリース 8.1.5 または 8.1.6、および Oracle Internet Directory リリース 2.0.4 または 2.0.6 がコンピュータにすでにインストール済み	「Upgrade OID」画面が表示され、Oracle8*i* データベース リリース 8.1.7 および Oracle Internet Directory リリース 2.1.1 にアップグレードするようプロンプトが表示されます。	3-12 ページの「Oracle Internet Directory のアップグレード」

標準インストールの実行

Oracle8*i* データベース リリース 8.1.7 が現在インストールされていない場合、Oracle Universal Installer によって、Oracle Internet Directory がインストールされている *ORACLE_HOME* ディレクトリに自動的にデータベースがインストールされます。

1. インストールされたデータベースを Oracle Internet Directory で使用する場合は「Yes」を選択し、「Next」をクリックします。そうではなく、Oracle Internet Directory で別のデータベースを使用する場合、「No」を選択して「Next」をクリックし、ステップ 4 に進みます。

   「Oracle SID」画面が表示されます。

2. インストール済みのデータベースの SID を入力します。
3. 「Next」をクリックします。ステップ 5 に進みます。

   「Database Identification」画面が表示されます。

4. 該当フィールドに、グローバル・データベース名および SID を入力します。

フィールド	入力内容
Global Database Name	ネットワーク・ドメイン内の他のデータベースから識別される一意のドメイン名付きデータベース名。たとえば、次のようになります。 `sales.us.acme.com` `sales` はデータベースに付ける名前で、`us.acme.com` はデータベースが存在するネットワーク・ドメインです。
SID	コンピュータ上の他のデータベースから識別される一意のデータベース・インスタンス名。SID のデフォルトは、グローバル・データベース名のデータベース名の部分（上の例では `sales`）の先頭の 8 文字またはピリオドの前までに自動的に設定されます。デフォルト値を使用するか、変更します。

「OiD Database File Location」画面が表示されます。

5. Oracle Internet Directory のデータベース・ファイルのインストール先ディレクトリを入力します。オラクル社では、データベース・ファイルと Oracle ソフトウェアをそれぞれ別のドライブにインストールすることをお薦めします。これらのデータベース・ファイルには、設定時に作成された Oracle Internet Directory 固有の表およびスキーマが含まれます。

6. 「Next」をクリックします。

   DBA グループのメンバーでない場合、「Privileged Operating System Groups」画面が表示されます。Oracle Universal Installer によって Oracle DBA および Operator 権限を割り当てる UNIX グループを指定します。この画面の説明は、オンライン・ヘルプを参照してください。

7. 「Next」をクリックします。

   「Summary」画面が表示されます。十分なディスク領域があるかどうか、情報を確認します。インストールがいったん開始されると、製品または領域割当てを変更できません。

8. 「Install」をクリックします。選択された製品がインストールされるまで待機します。

   インストール中に、次の情報が自動的に設定されます。

項目	自動的に設定される内容
暗号化されたパスワードの使用	はい
暗号化方式	MD4
Oracle Internet Directory に格納されるディレクトリ・エントリ数（概算）	10,000 エントリ未満
管理者識別名のパスワード	welcome

9. 「Install」画面が表示されます。プロンプトが表示されたら、`root.sh` スクリプトを実行します。

   Oracle Universal Installer により、*`ORACLE_HOME`* ディレクトリ内に `root.sh` スクリプトが作成され、Oracle 製品のインストールが完了すると、このスクリプトを実行するようプロンプトが表示されます。`root` ユーザーとしてログインし、スクリプトを実行して Oracle 製品に必要なファイル許可を設定し、その他の `root` 関連の設定作業を実行します。

```
# cd $ORACLE_HOME
# ./root.sh
```

   `root.sh` スクリプトでは、アクションを実行する前に、環境の確認のプロンプトが表示されます。環境を設定しなおす必要がある場合、`root.sh` スクリプトを終了します。再び Oracle Universal Installer を実行する必要はありません。`root.sh` が正しく実行されたら、警告画面で「OK」をクリックし、インストールを継続します。

インストールした製品により、root.sh の進行状況を示す様々なメッセージが表示されます。また、ユーザー名の入力プロンプトや、追加指示が表示される場合があります。

root.sh スクリプトによって、ローカルの bin ディレクトリを指定するよう求められます。このディレクトリが存在しない場合、root.sh によって作成されます。

10. インストールの最後に「Configuration Tools」画面が表示され、自動的に次の Assistant が起動され、ご使用のネットワークおよび Oracle Internet Directory 環境が作成および設定されます。

Assistant	起動されるケース	実行内容
Net8 Configuration Assistant	コンピュータに現在インストールされていない場合	Net8 Server ネットワーキング・ソフトウェアを設定するようプロンプトが表示されます。「Perform typical configuration」を選択し、各画面で「Next」ボタンを選択して、すべてのデフォルト設定を使用します。
OiD Configuration Assistant	すべての場合	Oracle8*i* データベース・サーバーに Oracle8*i* 表領域およびスキーマを作成し、Oracle ディレクトリ・サーバーを起動します。 **注意：**データベースをインストールする必要がある場合、Oracle Database Configuration Assistant が OiD Configuration Assistant 内で自動的に起動され、UTF8 キャラクタ・セットを使用したデータベースが作成されます。

11. 「End of Installation」画面が表示されます。

12. 「Exit」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「Next Install」をクリックして次の製品をインストールします。「Next Install」を選択すると、Oracle Universal Installer の「File Locations」画面に戻ります。

> **関連項目：** インストール・セッションのログ・ファイルのサマリーの表示方法は、3-14 ページの「インストール・セッションのログの表示」を参照してください。

カスタム・インストールの実行

カスタム・インストールを選択した場合、「Component Locations」画面で、一部のコンポーネントのインストール先の代替の場所を選択するようプロンプトが表示されます。

1. デフォルトの場所を使用するには、「Next」を選択します。そうでない場合、コンポーネントを選択すると、デフォルトの場所を変更するためのテキスト・ボックスが表示されます。「Next」をクリックします。「Database Identification」画面が表示されます。

2. Oracle8*i* データベースのグローバル・データベース名および SID を入力し、「Next」をクリックします。

フィールド	入力内容
Global Database Name	ネットワーク・ドメイン内の他のデータベースから識別される一意のドメイン名付きデータベース名。たとえば、次のようになります。 `sales.us.acme.com` `sales` はデータベースに付ける名前で、`us.acme.com` はデータベースが存在するネットワーク・ドメインです。
SID	コンピュータ上の他のデータベースから識別される一意のデータベース・インスタンス名。SID のデフォルトは、グローバル・データベース名のデータベース名の部分（上の例では `sales`）の先頭の 8 文字またはピリオドの前までに自動的に設定されます。デフォルト値を使用するか、変更します。

データベースがインストールされていない場合、「OiD Database File Location」画面が表示されます。

3. Oracle Internet Directory のデータベース・ファイルのインストール先ディレクトリを入力します。オラクル社では、データベース・ファイルと Oracle ソフトウェアをそれぞれ別のハード・ディスクにインストールすることをお薦めします。これらのデータベース・ファイルは、設定時に作成された Oracle Internet Directory 固有の表およびスキーマに対応します。

4. 「Next」をクリックします。

「OiD User Password Encryption」画面が表示されます。

5. パスワードの暗号化を使用するかどうかを選択し、「Next」をクリックします。

「User Password Hashing Algorithm」画面が表示されます。

6. 使用する暗号化方式を選択し、「Next」をクリックします。

「OiD Administrator Password」画面が表示されます。

7. パスワードを入力します。

このパスワードを使用して、Oracle Internet Directory のすべての変更を行います。

8. 同じパスワードをもう 1 回入力し、「Next」をクリックします。

「OiD Size Configuration」画面が表示されます。

9. Oracle Internet Directory に格納されるディレクトリ・エントリ数（概算）を選択し、「Next」をクリックします。

「Summary」画面が表示されます。

10. 十分なディスク領域があるかどうか、必要な領域を確認し、「Install」を選択します。

    インストールの最後に「Configuration Tools」画面が表示され、自動的に次の Assistant が起動され、Oracle Internet Directory で使用する Oracle8*i* データベースが作成および設定されます。

Assistant	起動されるケース	実行内容
Net8 Configuration Assistant	Net8 Client リリース 8.1.7 が現在指定されている Oracle ホームにインストールされていない場合 **注意 :** この Oracle ホーム内の Net8 Client リリース 8.1.6 以前はアップグレードされます。	Net8 Server ネットワーキング・ソフトウェアを設定するようプロンプトが表示されます。「Perform typical configuration」を選択し、各画面で「Next」ボタンを選択して、すべてのデフォルト設定を使用します。
OiD Configuration Assistant	すべての場合	Oracle8*i* データベース内に Oracle Internet Directory 表領域およびスキーマを作成し、Oracle Internet Directory サーバーを起動します。 **注意 :** Oracle Database Configuration Assistant は、OiD Configuration Assistant の途中で自動的に起動され、これに従って Oracle8*i* データベースのカスタム・インストールを行います。プロンプトが表示されたら、UTF8 キャラクタ・セットを必ず選択してください。

    「End of Installation」画面が表示されます。

11. 「Exit」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「Next Install」をクリックして次の製品をインストールします。

Oracle Internet Directory のアップグレード

ご使用のシステムに、以前にインストールされた Oracle Internet Directory が存在する場合、「Upgrade OiD」画面が表示されます。

Oracle Universal Installer によってこの場所に既存の Oracle8*i* データベースが検出された場合、データベースのインストールは行われません。ただし、オラクル社では、最適な結果のために、Oracle8*i* データベースが存在しないシステムに Oracle Internet Directory をインストールすることをお薦めします。

既存の Oracle Internet Directory および Oracle8*i* Enterprise Edition をアップグレードする予定であり、また、Oracle Internet Directory がすでに個別にインストールされている場合、各プログラムを個別にアップグレードして、Oracle Internet Directory のすべてのコンポーネントがアップグレードされたことを確認する必要があります。

Oracle Internet Directory をアップグレードする前に、次のプロセスを停止します。

- Oracle リスナー・サーバー
- Oracle データベース・サーバー
- Oracle ディレクトリ・サーバー

注意： Oracle8*i* リリース 8.1.7 データベースがすでにインストールされている場合、データベースとリスナーが稼動中であることを確認してください。また、パスワードなしで `internal` ユーザー・アカウントとして接続可能であることを確認してください。

```
$ sqlplus internal
```

`internal` アカウントでパスワードなしでログインするための設定の手順は、『Oracle8*i* 管理者ガイド』の第 1 章を参照してください。

基本リスナー・ステータス情報を表示するには、次のように入力します。

```
$ lsnrctl status [listener_name]
```

リスナー名がデフォルトの `listener` 以外の名前である場合、*`listener_name`* フィールドは必須です。

---

1. 「Yes」を選択し、Oracle Internet Directory で使用するよう設定済みの Oracle データベースをアップグレードします。
2. 「Next」をクリックします。

   「Oracle SID」画面が表示されます。
3. アップグレードする Oracle データベースのシステム識別子（SID）を入力します。

   「OiD Password」画面が表示されます。
4. Oracle ディレクトリ・サーバー・ユーザーのパスワード（デフォルトでは *ODS*）および Oracle Internet Directory の管理者のパスワード（デフォルトでは *WELCOME*）を入力します。
5. 「Configuration Tools」画面が表示され、自動的に次の Assistant が起動されて、ご使用の Oracle データベースおよび Oracle Internet Directory 環境がアップグレードされます。

Assistant	アップグレードの内容
Oracle Data Migration Assistant	Oracle8*i* リリース 8.1.5 または 8.1.6 から 8.1.7 へ
OiD Upgrade Assistant	Oracle Internet Directory リリース 2.0.4 または 2.0.6 からリリース 2.1.1 へ

インストール・セッションのログの表示

インストーラが初めて実行されたときに oraInventory ディレクトリが作成され、システムにインストール済みの製品のインベントリ、およびその他のインストール情報が記録されます。この情報は、インストール時の問題の診断および解決に役立ちます。

oraInventory の場所は、/var/opt/oracle/oraInst.loc で定義されています。

最新のログ・ファイルは、*oraInventory_location*/logs/installActions.log です。以前のインストール・セッションのログ・ファイル名の形式は、installActions*datetime*.log のようになります。

たとえば、次のようになります。
installActions1999-07-14_09-00-56-am.log

注意： oraInventory ディレクトリまたはその内容を削除したり、手動で変更しないでください。そうした場合、Oracle Universal Installer がご使用のシステムでインストール済みの製品を検出できなくなります。

ORACLE_HOME/install 内の make.log ファイルには、インストール・プロセスでコールされたすべての make アクションのログが含まれています。インストール中にリンク・エラーが発生した場合、make.log ファイルで確認できます。make.log ファイルを削除または変更しないでください。

インストールの失敗後のクリーン・アップ

インストールが失敗した場合、失敗したインストール中にインストーラによって作成されたファイルを削除する必要があります。

インストールの失敗後のクリーン・アップを行うには、次のステップを実行します。

1. Oracle Universal Installer を起動します。
2. 「De-install Products」ボタンをクリックし、インストールの失敗後に残っている製品をすべて選択します。
3. 「Remove」ボタンをクリックします。

クリーン・アップを完了するために、*ORACLE_HOME* ディレクトリを手動で削除する必要がある場合があります。インストーラによってファイルがシステムにコピーされ、失敗したインストール中に登録できなかった可能性があるためです。アンインストールによって *ORACLE_HOME* がクリーン・アップされ、アンインストール後に重要なファイルが残っていない場合は、このステップを実行する必要はありません。

非対話モードの（サイレント）インストールおよび設定

レスポンス・ファイルを使用して Oracle Universal Installer を実行することにより、Oracle8*i* 製品のインストールを非対話モードで行うことができます。Oracle Universal Installer は、ユーザーに求める入力情報の一部またはすべてをこのテキスト・ファイルに含まれた変数および値から取得します。プロンプトから入力される返答をすべてレスポンス・ファイルに含めることにより、グラフィカルな出力を表示しないサイレント・インストールを実行できます。また、レスポンス・ファイルを使用して、Oracle Data Migration Assistant、Net8 Configuration Assistant、Oracle Database Configuration Assistant および Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を非対話モードで実行できます。

レスポンス・ファイルの準備

Oracle Internet Directory の CD-ROM には、各インストール・カテゴリおよびインストール・タイプごとに 1 つずつ、合計 5 つの Oracle Universal Installer のレスポンス・ファイルと、3 つの構成ツールのレスポンス・ファイルが入っています。ご使用の環境に合うように、このレスポンス・ファイルを編集する必要があります。特に、カスタム・インストール用のレスポンス・ファイルは、非対話モードのインストールに使用する前に多くの部分を編集する必要があります。

レスポンス・ファイルを使用するには、Oracle Internet Directory の CD-ROM からご使用のシステムにマウントされているドライブへ、レスポンス・ファイルをコピーします。たとえば、次のようになります。

```
$ cd cdrom_mount_point_directory/response
$ cp oidtyp.rsp local_directory
```

レスポンス・ファイルを任意のテキスト・エディタで編集し、ご使用のシステムに合った情報を含めます。各ファイルには、レスポンス・ファイルを正しく設定するための手順の説明が含まれています。表 3-1 に、Oracle Internet Directory の CD-ROM に含まれているレスポンス・ファイルを示します。

表 3-1 レスポンス・ファイル

ファイル名	レスポンスの内容
`oidtyp.rsp`	Oracle Internet Directory サーバーのインストール
`oidcus.rsp`	Oracle Internet Directory サーバーのカスタム・インストール
`oidclnttyp.rsp`	Oracle Internet Directory クライアントのインストール
`dbca.rsp`	Oracle Database Configuration Assistant
`net8ca.rsp`	Net8 Configuration Assistant

レスポンス・ファイルの指定

インストール時に Oracle Universal Installer でレスポンス・ファイルを使用する場合、3-5 ページの「Oracle Universal Installer（OUI）の起動」と同じステップを実行しますが、Oracle Universal Installer の起動時に、使用するレスポンス・ファイルの場所をパラメータで指定します。

```
$ ./runInstaller [-silent] -responseFile filename
```

Configuration Assistant をインストール・セッション外でサイレント・モードで使用するには、レスポンス・ファイルを使用する必要があります。Oracle Universal Installer からサイレント・モードの Configuration Assistant を実行するか、または Configuration Assistant をスタンドアロン・モードで実行します。同じモードおよびレスポンス・ファイルのパラメータを使用して、Configuration Assistant をコマンドラインで起動します。

完全に非対話的なインストールまたは設定セッションを実行するには、`-silent` パラメータを使用します。サイレント・モードでも、2-12 ページの「DISPLAY」で説明されているように、DISPLAY 環境変数は設定する必要があります。

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を非対話モードで実行するには、`-silent` および `-responseFile` パラメータの両方を使用する必要があります。

インストールが成功したか失敗したかは、`silentInstall.log` ファイルにログとして記録されます。ご使用のシステムに Oracle インベントリが存在する場合、`silentInstall.log` ファイルはそこに作成されます。そうでない場合、*`oraInventory_location`*`/logs/` ディレクトリ内に作成されます。非対話モードのインストール・セッションの詳細な結果は、*`oraInventory_location`*`/logs/installActions.log` ファイルに記録されます。

注意： レスポンス・ファイルを正しく設定せずに非対話モードのセッションを実行すると、Oracle Universal Installer または Configuration Assistant は失敗します。

関連項目： サイレント・インストールおよびレスポンス・ファイルを使用したインストールの詳細は、『Oracle Universal Installer Concepts Guide』を参照してください。

サイレント・モードによる初めてのインストール

Oracle Universal Installer をサイレント・モードで実行してシステム上に初めて Oracle 製品をインストールする場合、`oraInst.loc` ファイルを手動で作成する必要があります。このファイルにより、システム上にインストールされた Oracle 製品のインベントリの作成先ディレクトリが指定されます。このファイルの作成前に、第 1 章および第 2 章の作業を実行してください。

oraInst.loc ファイルを作成するには、次のステップを実行します。

1. root ユーザーでログインします。

   ```
   $ su
   ```

2. /var/opt/oracle ディレクトリがご使用のシステムに存在しない場合、作成する必要があります。

   ```
   # mkdir /var/opt/oracle
   ```

3. /var/opt/oracle ディレクトリに移動します。

   ```
   # cd /var/opt/oracle
   ```

4. テキスト・エディタを使用して、oraInst.loc というファイルを作成し、次の 2 行を含めます。

   ```
   inventory_loc=inventory_directory.
   inst_group=
   ```

   inventory_loc を ORACLE_BASE/oraInventory に設定します。たとえば、ORACLE_BASE が /uo1/app/oracle の場合、inventory_directory は /uo1/app/oracle/oraInventory にします。

   inst_group= を 2 行目に含めます。ただし、設定はしないでください。

エラー処理

不正なコンテキスト、書式またはタイプの変数の値が存在する場合、その値は指定されていないものとして処理されます。セクション外の変数はすべて無視されます。

レスポンス・ファイルが指定されていない場合、あるいは不適切または不完全なレスポンス・ファイルでサイレント・インストールを実行した場合、非対話モードのインストールは失敗します。サイレント・インストールの実行中に Oracle Universal Installer でエラーが発生すると（ディスク領域の不足など）、インストールは失敗します。非対話モードのインストールの結果は、インストール・セッションのログ・ファイルに記録されます。

> **関連項目：** インストール・セッションのログ・ファイルのサマリーの表示方法は、3-14 ページの「インストール・セッションのログの表示」を参照してください。

レスポンス・ファイルの値の妥当性チェック

Oracle Universal Installer または Configuration Assistant は、実行時にレスポンス・ファイルの計算および妥当性チェックを行います。妥当性チェックのプロセスでエラーが発生すると、インストールまたは設定は終了します。

4

インストール後の作業

Oracle Universal Installer のセッション完了後、いくつかのインストール後の作業を実行し、Oracle8*i* を設定する必要があります。この章では、これらの必須ステップおよびオプションのステップについて説明します。

- ユーザー・パスワード
- root ユーザーで実行する設定作業
- oracle ユーザーで実行する設定作業
- Oracle Internet Directory のインストール後の作業
- インストール後の初期データベースの内容の確認
- Oracle Internet Directory のアンインストール

注意： この章では、基本設定についてのみ説明します。通常本番システムに必要な、より高度な設定およびチューニングについては、ご使用のプラットフォーム用の『Oracle8*i* 管理者ガイド』および製品管理およびチューニング用のマニュアルで説明されています。

ユーザー・パスワード

オラクル社では、インストール後すぐにユーザー用のパスワードを変更することをお薦めします。

パスワードを変更するには、次のステップを実行します。

1. SQL*Plus を開始します。

   ```
   $ sqlplus
   ```

2. 変更するユーザー名とパスワードで接続します。

   ```
   Enter user-name: username/password
   ```

3. パスワードを変更します。

   ```
   SQL> ALTER USER USERNAME IDENTIFIED BY PASSWORD;
   ```

関連項目： Oracle Security Manager または Oracle DBA Studio を使用したパスワードの変更方法は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

root ユーザーで実行する設定作業

root ユーザーでログインし、必要に応じて次の作業を実行します。

- UNIX アカウントの追加作成
- データベース・ファイルのセキュリティの検証
- データベースの起動および停止の自動化（オプション）

UNIX アカウントの追加作成

必要に応じて、admintool または useradd などのシステム管理ユーティリティを使用して、UNIX アカウントを追加作成します。システム内のデータベース管理者ユーザーは、それぞれ OSDBA グループのメンバーである必要があります。

データベース・ファイルのセキュリティの検証

Oracle Internet Directory を米国の NCSC C2 またはヨーロッパの ITSEC E3 セキュリティ評価設定と同様に設定する場合、データベース・ファイルのセキュリティを検証し、Oracle ソフトウェアのインストールの整合性を確認します。セキュリティが問題にならない場合、この作業はオプションです。

保護されたデータへの無許可のアクセスを防ぐために、様々なファイルを保護する必要があります。ファイル権限と推奨する所有権は、次のとおりです。

- *oracle* アカウントは、Oracle システム内のすべてのファイルおよびディレクトリに対し、読込み、書込みおよび実行権限が必要です。

- oinstall グループは、oraInventory ディレクトリに対する読込み、書込みおよび実行許可が必要ですが、それ以外のディレクトリには書込み許可を付与しないでください。
- *oracle* アカウントまたは oinstall グループ以外のユーザーには、Oracle 内のファイルまたはディレクトリに対する書込みアクセス権を一切付与しないでください。

表 4-1 に、様々なファイルに対するディレクトリおよびファイル許可のサマリーを示します。

注意： これらの許可はデフォルト値です。これらは変更しないでください。

表 4-1 Oracle ディレクトリおよびファイルのアクセス権

ディレクトリ / ファイル	許可	コメント
すべてのデータベース、redo ログおよび制御ファイル（通常これらのファイルの拡張子は、.dbf、.log および .ctl）	640 rw-r----	データへの任意のアクセスを維持するために、すべてのデータベース、redo ログおよび制御ファイルは、*oracle* アカウントおよび oinstall グループからのみ読込み可能である必要があります。
$ORACLE_HOME/bin/	751 rwxr-x--x	*oracle* ソフトウェア所有者から書込み可能で、すべてのユーザーから実行可能である必要があります。
oracle 実行可能ファイル、および次のネットワーク実行可能ファイル： $ORACLE_HOME/bin/oracle および $ORACLE_HOME/bin/dbsnmp	6751 rws-r-s--x	6 によって setuid ビットおよび setgid ビットが設定され、実行ユーザーに関係なく、実行可能ファイルが *oracle* ユーザーおよび DBA グループとして実行されます。
その他すべての実行可能ファイル	751 rwxr-x--x	*oracle* アカウントから書込み可能で、すべてのユーザーから実行可能である必要があります。
$ORACLE_HOME/lib/	755 rwxr-xr-x	このディレクトリは、所有者によって読込み、書込みおよび実行可能で、その他すべてのユーザーから読込みおよび実行可能です。
$ORACLE_HOME/lib/ 内の全ファイル	644 rw-r--r--	これらのファイルは、所有者によって読込みおよび書込み可能で、その他すべてのユーザーから読込み可能です。
$ORACLE_HOME/rdbms/log	751 rwxr-x--x	このディレクトリ内のファイルへのアクセスを、*oracle* アカウントおよび oinstall グループに制限します。

表 4-1 Oracle ディレクトリおよびファイルのアクセス権（続き）

ディレクトリ / ファイル	許可	コメント
$ORACLE_HOME/sqlplus または $ORACLE_HOME/rdbms などの製品サブディレクトリ	751 rwxr-x--x	ログ・ファイルへのアクセスを、*oracle* アカウントおよび oinstall グループに制限します。
$ORACLE_HOME/sqlplus または $ORACLE_HOME/rdbms 内のファイル	644 rw-r--r--	これらのファイルは、所有者によって読込みおよび書込み可能で、その他すべてのユーザーから読込み可能です。
$ORACLE_HOME/network/trace	777 rwxrwxrwx または 730 rwx-wx---	開発中には 777 を使用し、トレース・ファイルの表示および作成に関し、幅広いアクセスを許可します。本番環境では、730 を使用し、*oracle* アカウントおよび oinstall グループのメンバーのみ、トレース・ファイルにアクセス可能にしてください。
製品の admin ディレクトリ内の全ファイル、たとえば $ORACLE_HOME/rdbms/admin および $ORACLE_HOME/sqlplus/admin	644 rw-r--r--	SQL スクリプトは、通常、SYS ユーザーとして実行する必要があります。

データベースの起動および停止の自動化（オプション）

システムの起動時に自動的に Oracle データベースを起動し、システムの停止時に Oracle データベースを停止するよう、システムを設定可能です。データベースの起動の自動化はオプションですが、自動停止は、データベースの不正終了を防ぐため、設定することをお薦めします。

dbstart および dbshut スクリプトが $ORACLE_HOME/bin ディレクトリに入っており、データベースの起動および停止の自動化に使用できます。

dbstart および dbshut スクリプトは、oratab ファイル内の同じエントリを参照するため、両方のスクリプトを同じデータベース・セットに適用する必要があります。たとえば、dbstart によってデータベース sid1、sid2 および sid3 を自動的に起動し、dbshut によってデータベース sid1 および sid2 のみを停止することはできません。ただし、dbstart をまったく使用せずに、dbshut によっていくつかのデータベースを停止するよう指定することは可能です。このようにするには、停止ファイルに dbshut エントリを含め、システム起動ファイルには dbstart を含めません。

> **関連項目：** システムの起動および停止の手順の詳細は、ご使用のシステムのドキュメントの init コマンドに関する説明を参照してください。

このプロセスは、起動および停止の自動化を設定する新規データベースすべてについて実行する必要があります。dbstart および dbshut スクリプトがシステムの起動時に呼び出されるよう設定するには、次のステップを実行します。

1. /var/opt/oracle/oratab ファイルを編集します。

   oratab ファイル内のデータベース・エントリは、次の形式で表示されます。

   ORACLE_SID:*ORACLE_HOME*:{Y|N}

   Y または N により、dbstart および dbshut スクリプトによってデータベースの起動および停止を行うかどうかを指定します。起動するすべてのデータベースのエントリを探します。最初のフィールドの *ORACLE_SID* によって識別されます。それぞれについて、最後のフィールドを Y に変更します。

2. /etc/init.d ディレクトリ内に dbora という名前のファイルを（まだ存在しない場合）作成します。

3. dbora ファイルの最後に、次のようなエントリを（まだ存在しない場合）作成します。必ず dbstart ユーティリティの絶対パスを指定してください。

```
#!/bin/sh
# Set ORA_HOME to be equivalent to the ORACLE_HOME
# from which you wish to execute dbstart and
# dbshut
# set ORA_OWNER to the user id of the owner of the
# Oracle database in ORA_HOME
ORA_HOME=/u01/app/oracle/product/8.1.7
ORA_OWNER=oracle
if [! -f $ORA_HOME/bin/dbstart]
then
echo "Oracle startup: cannot start"
exit
fi
case "$1" in
'start')

# Start the Oracle databases:
# The following command assumes that the oracle login will not prompt the
# user for any values

su - $ORA_OWNER -c $ORA_HOME/bin/dbstart &
;;
'stop')

# Stop the Oracle databases:
# The following command assumes that the oracle login will not prompt the
# user for any values
```

```
su - $ORA_OWNER -c $ORA_HOME/bin/dbshut &
;;
esac
```

4. 次のように入力して dbora をリンクします。

```
# ln -s /etc/init.d/dbora /etc/rc0.d/K10dbora
# ln -s /etc/init.d/dbora /etc/rc2.d/S99dbora
```

oracle ユーザーで実行する設定作業

oracle ユーザーとして、次の作業を実行します。

- UNIX アカウントの起動ファイルの更新
- 環境変数の設定
- 初期化パラメータの設定

UNIX アカウントの起動ファイルの更新

oracle アカウントおよび Oracle ユーザーの UNIX アカウントの起動ファイルを更新します。

環境変数の設定

Oracle8*i* 製品を使用する前に、*oracle* アカウントの .profile または .login ファイルの環境変数を設定します。表 4-2「環境変数の設定」に、お薦めする設定を示します。ここで使用する設定は、2-11 ページの「作業 2: 環境変数の設定」で説明されている、インストール中に使用した設定に対応している必要があります。環境変数の設定の構文は次のとおりです。

Bourne または Korn シェルの場合

```
variable_name=value; export variable_name
```

C シェルの場合

```
setenv variable_name value
```

注意： CKPT、PMON および DBWR など、Oracle プロセスに使用される環境変数と同じ名前の環境変数は定義しないでください。

表 4-2 環境変数の設定

環境変数	推奨する設定
LD_LIBRARY_PATH	$ORACLE_HOME/lib を含めるように設定します。
ORACLE_BASE	*software_mount_point*/app/oracle
ORACLE_HOME	$ORACLE_BASE/product/8.1.7
ORACLE_SID	Oracle Universal Installer でプロンプトが表示された際に入力した値を記録していない場合、Oracle Universal Installer のログ・ファイルで調べます。ログ・ファイルは次の場所に存在します。 *oraInventory_location*/logs/installActions.log *oraInventory_location* は、/var/opt/oracle/oraInst.loc で定義されています。
PATH	新規の $ORACLE_HOME/bin ディレクトリが PATH 設定に含まれていることを確認します。PATH の要件は、第 2 章「インストール前の作業」を参照してください。
CLASSPATH	CLASSPATH には、次のパスを含める必要があります。 *JRE_Location/lib*, $ORACLE_HOME/JRE/lib/rt.jar:$ORACLE_HOME/jlib/<*product jar file*>:$ORACLE_HOME/*product*/jlib/<*product jar file*> **注意：***JRE_Location* は $ORACLE_HOME/JRE として定義されます。
TNS_ADMIN	Net8 設定ファイルの場所を設定します。この変数は、Net8 設定ファイルがデフォルトの場所に存在しない場合のみ設定する必要があります。
TWO_TASK	TWO_TASK は、tnsnames.ora で定義されている Net8 接続文字列の別名に設定します。これは、クライアント・ソフトウェアがサーバーに接続する際にデフォルトで使用します。

LD_LIBRARY_PATH

共有ライブラリを使用する Oracle 製品を使用する場合、必須です。$ORACLE_HOME/lib を含めるように LD_LIBRARY_PATH を設定します。

ORACLE_BASE

Oracle ソフトウェアおよび管理ファイル構造の最上位ディレクトリを指定します。OFA の推奨値は次のとおりです。

software_mount_point/app/oracle

たとえば、次のようになります。

```
/u01/app/oracle
```

ORACLE_HOME
特定のリリースの Oracle ソフトウェアが含まれているディレクトリを指定します。OFA の推奨値は次のとおりです。

```
$ORACLE_BASE/product/release
```

たとえば、次のようになります。

```
/u01/app/oracle/product/8.1.7
```

ORACLE_SID
Oracle Server のインスタンスの名前である Oracle システム識別子（SID）を指定します。*sid* は多くのファイル名の一部として使用されるため、オラクル社では、異なるオペレーティング・システムでのファイル名の問題を回避するため、4 文字以下に制限することをお薦めします。

PATH
Oracle ソフトウェアのインストール後、検索パスには次のすべてのパスが含まれます。

- $ORACLE_HOME/bin、/bin、/usr/bin および /usr/ccs/bin
- root.sh スクリプトの実行時に指定されたローカルの bin ディレクトリ（通常は /usr/local/bin）

> **注意：** 検索パスに /usr/ucb を設定する必要がある場合、検索順序で必ず /usr/ccs/bin より後に設定してください。

CLASSPATH
CLASSPATH 変数は、Java 機能に使用されます。CLASSPATH は、製品によって異なります。詳細は、ご使用の製品のドキュメントを参照してください。既存の設定以外に、CLASSPATH には次の JRE の場所が含まれている必要があります。

```
$ORACLE_HOME/JRE/lib:$ORACLE_HOME/jlib:$ORACLE_HOME/product/jlib
```

product 変数は、JRE または Java 機能に必要なファイルが存在する *ORACLE_HOME* 内の rdbms または network などの製品ディレクトリを示します。

TNS_ADMIN
Net8 設定ファイルをデフォルトの場所（/var/opt/oracle または $ORACLE_HOME/network/admin）以外の場所に入れるには、TNS_ADMIN 環境変数に、Net8 の設定ファイルが存在するディレクトリを設定します。たとえば、tnsnames.ora が /tns ディレクトリに存在する場合、TNS_ADMIN に /tns を設定します。

Oracle 製品により、次の順序で tnsnames.ora ファイルが探されます。

1. 現行ユーザーのホーム・ディレクトリ内の .tnsnames.ora ファイル（ファイル名の前にピリオドがあるため、注意してください）
2. $TNS_ADMIN/tnsnames.ora
3. /var/opt/oracle/
4. $ORACLE_HOME/network/admin/

tnsnames.ora ファイルがこのいずれかの場所に存在することを確認してください。存在しない場合、Net8 を通じてローカル・ネーミングを使用してデータベースに接続できない可能性があります。

TWO_TASK

クライアント / サーバー設定を使用している場合、TWO_TASK に、クライアント・ソフトウェアがデフォルトで接続するデータベースのネット・サービス名を設定できます。TWO_TASK を設定すると、データベースのネット・サービス名を指定しなくても、Oracle クライアント・ソフトウェアによってデータベースに接続可能になります。ネット・サービス名の詳細は、ご使用のプラットフォーム用の『Oracle8*i* Net8 管理者ガイド』および『Oracle8*i* 管理者ガイド』を参照してください。

oraenv スクリプトの初期化

oraenv スクリプトを使用して、*oracle* ユーザーに共通の環境を設定するオプションを選択可能です。oraenv スクリプトのシングル・インスタンスまたは複数インスタンスを設定するには、次の手順を実行してください。

注意： C シェルでは、oraenv コマンドのかわりに coraenv コマンドを使用します。

シングル・インスタンスのマシン

シングル・インスタンスのマシンでは、*oracle* アカウントの .profile または .login ファイルで ORACLE_SID 環境変数を設定し、続いて次のコマンドにより、ログイン時に oraenv ファイルを初期化します。

Bourne または Korn シェルの場合

```
ORAENV_ASK=NO
. /usr/local/bin/oraenv
```

C シェルの場合

```
set ORAENV_ASK = NO
source /usr/local/bin/coraenv
unset ORAENV_ASK
```

複数のインスタンスのマシン

複数のインスタンスのマシンの場合、*oracle* アカウントの起動ファイルの最後に、oraenv ファイルの初期化に必要なインスタンス名およびコマンドのリストを含めます。

Bourne または Korn シェルの場合

```
#!/usr/bin/sh
echo "The SIDs on this machine are:"
cat /var/opt/oracle/oratab | awk -F: '{print $1}' | grep -v "#"
ORAENV_ASK="YES"
. /usr/local/bin/oraenv
```

C シェルの場合

```
#!/usr/bin/csh
echo "The SIDs on this machine are:"
cat /var/opt/oracle/oratab | awk -F: '{print $1}' | grep -v "#"
set ORAENV_ASK="YES"
source /usr/local/bin/coraenv
```

他の Oracle ユーザーの起動ファイルの更新

すべての *oracle* アカウント用に同じ環境を作成するには、各ユーザー起動ファイルの最後に次の行を含めるよう、起動ファイルを更新します。

- Bourne または Korn シェルによって使用される .profile ファイルの場合

  ```
  . /usr/local/bin/oraenv
  ```

  C シェルによって使用される .login ファイルの場合

  ```
  source /usr/local/bin/coraenv
  ```

- 4-6 ページの「環境変数の設定」で説明されている ORACLE_BASE、ORACLE_HOME および PATH 環境変数の設定。

oratab ファイルの更新

Oracle Database Configuration Assistant を使用せずに手動でデータベースを作成した場合、システムの設定が /var/opt/oracle/oratab ファイルに反映されていることを確認する必要があります。

システム上の各サーバー・インスタンスについて、次の書式でエントリを追加します。

ORACLE_SID:*ORACLE_HOME*:{Y|N}

Y または N により、dbstart および dbshut スクリプトを使用するかどうかを指定します。Oracle Database Configuration Assistant は、作成した各データベース用にエントリを自動的に追加します。

初期化パラメータの設定

初期化パラメータを変更し、ご使用のシステムで最適なパフォーマンスが得られるようシステムを設定およびチューニングできます。付属のデフォルトの init*sid*.ora ファイルは、$ORACLE_BASE/admin/*sid*/pfile ディレクトリに存在します。また、テンプレートの init.ora ファイルも $ORACLE_HOME/dbs に存在します。このファイルには、小規模、中規模および大規模なデータベース用の設定が含まれており、中規模および大規模なデータベース用の設定はコメント化されています。これらのサイズの設定は相対的なもので、データベースの経験的なサイズを示すものではありません。

init*sid*.ora パラメータの変更

Oracle Database Configuration Assistant を使用して標準の起動データベースを作成した場合、init*sid*.ora パラメータは自動的に設定されます。init*sid*.ora 内の初期化パラメータは、UNIX テキスト・エディタを使用して手動で変更可能です。変更後の init*sid*.ora ファイルをアクティブにするには、データベースを停止して再起動します。

パラメータ・ファイル内の *ORACLE_HOME* には、疑問符（?）などのシンボリック文字を使用すると、起動時にエラーが発生する可能性があるため、これらは使用しないでください。

データベースの起動時にロールバック・セグメントを自動的にオンラインにするには、init*sid*.ora ファイル内の rollback_segments のコメント化を解除する必要があります。

たとえば、次のものを変更します。

```
#rollback_segments = (r0, r1, r2, r3)
```

次のように変更します。

```
rollback_segments = (r0, r1, r2, r3)
```

> **関連項目：** init*sid*.ora パラメータおよび初期化パラメータのチューニングおよび設定の詳細は、ご使用のプラットフォーム用の『Oracle8*i* 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Internet Directory のインストール後の作業

インストール後に、次の作業を実行します。

インストール直後に cryptupgrd.sh を実行します。このスクリプトは、$ORACLE_HOME/ldap/bin 内に存在します。

> **関連項目：** 詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の事前作業の章を参照してください。

インストール後の初期データベースの内容の確認

データベースの識別

Oracle8*i* データベースは、グローバル・データベース名によって識別されます。グローバル・データベース名は、データベース名、およびデータベースが存在するネットワーク・ドメインで構成されます。グローバル・データベース名により、ネットワーク・ドメイン内の他のデータベースから、あるデータベースを一意に識別します。グローバル・データベース名は、Oracle8*i* データベースのインストール時に、「Database Identification」画面の表示プロンプトで作成します。グローバル・データベース名の書式は次のとおりです。

database_name.database_domain

たとえば、次のようになります。

sales.us.acme.com

項目	説明
sales	データベースに付ける名前。データベース名部分は、8 文字以下の文字列で、英数字およびその他一部の文字を使用可能です。また、データベース名は、init.ora ファイル内の DB_NAME パラメータにも割り当てられます。
us.acme.com	データベースが存在するネットワーク・ドメインで、これによってグローバル・データベース名が一意になります。ドメイン部分は、128 文字以下の文字列で、英数字、ピリオド（.）およびその他一部の文字を使用可能です。また、ドメイン名は、init.ora ファイル内の DB_DOMAIN パラメータにも割り当てられます。

DB_NAME パラメータ（値は sales）および DB_DOMAIN 名前パラメータ（値は us.acme.com）が組み合せられて init.ora ファイル内の SERVICE_NAMES パラメータ（値は sales.us.acme.com）に割り当てられるグローバル・データベース名の値が作成されます。

システム識別子（SID）は、データベースを参照する特定の Oracle8*i* インスタンスを識別します。SID により、コンピュータ上の他のデータベースから、あるデータベースを一意に識

別します。複数の Oracle ホームを使用することにより、1 つのコンピュータ上で複数のアクティブな Oracle データベースを使用できます。各データベースに、一意の SID およびデータベース名が必要です。

SID は、「Database Identification」画面で入力したデータベース名の値から作成されます。SID には、64 字以下の英数字を使用可能です。

たとえば、ある Oracle データベースの SID およびデータベース名が ORCL である場合、各データベース・ファイルは `$ORACLE_BASE/oradata/ORCL` ディレクトリに存在し、初期化パラメータ・ファイルは `$ORACLE_BASE/admin/ORCL/pfile` ディレクトリに存在します。ディレクトリの ORCL という名前は、`DB_NAME` パラメータの値に基づきます。

表領域およびデータ・ファイル

Oracle8*i* データベースは、表領域という小さな論理領域に分割されています。各表領域は、1 つ以上の物理データ・ファイルに相当します。データ・ファイルには、表や索引などの論理データベース構造の内容が含まれています。1 つのデータ・ファイルは、1 つの表領域およびデータベースにのみ関連付けることが可能です。

注意： Oracle Database Configuration Assistant で異なる名前を指定していないかぎり、次の表で説明されている表領域およびデータ・ファイルは、カスタム・データベースにも自動的に含まれています。

Oracle8*i* データベース内の表領域には、`$ORACLE_BASE/oradata/<db_name>` ディレクトリ内に存在する次の種類のデータ・ファイルが含まれています。

表領域	データ・ファイル	内容
SYSTEM	system01.dbf	Oracle データベースで必要な表、ビューおよびストアド・プロシージャが含まれているデータ・ディクショナリ。この領域内の情報は、自動的に維持されます。SYSTEM 表領域は、すべての Oracle データベースに存在します。
USERS	users01.dbf	アプリケーション・データ。表にデータを作成および入力すると、この領域にデータが挿入されます。
TEMP	temp01.dbf	SQL 文の実行中に作成された一時表または索引（もしくはその両方）。大量のソートを行う SQL 文を実行する場合、この表領域を拡張する必要があります。たとえば、非常に大型の表で ANALYZE COMPUTE STATISTICS を行う場合、または構造体 GROUP BY、ORDER BY または DISTINCT などを使用する場合です。

表領域	データ・ファイル	内容
RBS	rbs01.dbf	正常に完了しないロールバック・トランザクション。長時間実行される、またはデータのボリュームが大きいトランザクションの場合、この表領域を拡張する必要があります。
INDX	indx01.dbf	USERS 表領域内のデータに関連付けられている索引。
DRSYS	dr01.dbf	Oracle *inter*Media Text 関連のスキーマ・オブジェクト。
TOOLS	tools01.dbf	なし。このデータ・ファイルは、サード・パーティー製または Oracle のツールや製品をインストールするために使用されます。

注意： 新規リポジトリの作成を選択し、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant の実行時にデフォルト設定を使用した場合、OEM_REPOSITORY という名前の表領域、および oem_repository.ora という名前のデータ・ファイルも作成されます。

関連項目：

- 『Oracle8*i* 概要』の「表領域とデータファイル」の章
- 『Oracle8*i* 管理者ガイド』の「表領域の管理」および「データファイルの管理」の章

初期化パラメータ・ファイル

初期データベースには、データベース初期化パラメータ・ファイルが 1 つ存在します。これは $ORACLE_BASE/admin/<*db_name*>/pfile ディレクトリ内に含まれています。

初期化パラメータ・ファイル	説明
init.ora	インスタンスを開始するには、パラメータ・ファイル init.ora が存在している必要があります。パラメータ・ファイルは、インスタンスの設定パラメータのリストが含まれているテキスト・ファイルです。初期データベースの init.ora ファイルには、事前設定済みのパラメータが含まれています。初期データベースを使用するためにこのファイルを編集する必要はありません。

関連項目： Oracle8*i* データベース固有の初期化パラメータおよびそのデフォルト値の詳細は、『Oracle8*i* 管理者ガイド』および『Oracle8*i* リファレンス・マニュアル』を参照してください。

REDO ログ・ファイル

初期データベースには、3 つの REDO ログ・ファイルが存在します。これらは $ORACLE_BASE/oradata/<*db_name*> ディレクトリ内に含まれています。

注意： REDO ログ redo01.log、redo02.log および redo03.log も、自動的にカスタム・データベースに含まれます。

データベース・ファイル	ディスク・サイズ	説明
redo01.log	1MB	REDO ログ・ファイルには、データベース・バッファ・キャッシュ内のデータに対する変更点がすべて記録されます。インスタンス障害が発生すると、メモリー内に存在していた変更データのリカバリに REDO ログ・ファイルが使用されます。 REDO ログ・ファイルは、循環方式で使用されます。たとえば、オンライン REDO ログが 3 つのファイルで構成されている場合、最初のファイルがいっぱいになると 2 番目のファイルに移り、次に 3 つ目のファイルに移ります。その後、最初のファイルが再利用され、いっぱいになると 2 番目のファイルが再利用される、というようになっています。
redo02.log	1MB	
redo03.log	1MB	

関連項目： 詳細は、『Oracle8*i* バックアップおよびリカバリ・ガイド』を参照してください。

制御ファイル

初期データベースには、3 つの制御ファイルが存在します。これらは $ORACLE_BASE/oradata/<*db_name*> ディレクトリ内に含まれています。

制御ファイル	説明
control01.ctl control02.ctl control03.ctl	制御ファイルは、データベースの起動および実行に必要な管理ファイルです。制御ファイルに、データベースの物理構造が記録されます。たとえば、制御ファイルには、データベース名、およびデータベースのデータ・ファイルや REDO ログ・ファイルの名前と場所が含まれています。

注意： control01.ctl、control02.ctl および control03.ctl ファイルも、自動的にカスタム・データベースに含まれます。オラクル社では、各データベースごとに 3 つ以上の制御ファイルを（異なる物理ドライブ上に）用意し、CONTROL_FILES 初期化パラメータに各制御ファイルをリストするよう設定することをお薦めします。

関連項目： この初期化パラメータ値の設定方法は、『Oracle8*i* 管理者ガイド』を参照してください。

ロールバック・セグメント

ロールバック・セグメントには、トランザクションによって変更されたデータの以前の値が（コミットされたかどうかに関係なく）記録されます。各データベースには 1 つ以上のロールバック・セグメントが含まれており、これらは、トランザクションがロールバックされた場合のために、トランザクションの処理を記録している部分です。ロールバック・セグメントは、読取り一貫性、トランザクションのロールバック、およびデータベースのリカバリのために使用されます。

初期データベースには、次のロールバック・セグメントが含まれています。

ロールバック・セグメント	表領域の内容	使用ユーザー
SYSTEM	SYSTEM	SYS
RB_TEMP	SYSTEM（プライベート）	SYS
RB1 から RB16	RBS	PUBLIC（ロールバック・セグメントを必要とするインスタンスならどれでも使用可能なロールバック・セグメントのプール）

データ・ディクショナリ

データ・ディクショナリは、データベース、その構造およびユーザーに関するリファレンス情報が入っている表およびビューの保護付きコレクションです。ディクショナリには、次のデータが格納されています。

- Oracle データベース・ユーザーの名前
- 各ユーザーに付与されている権限およびロール
- スキーマ・オブジェクトの名前および定義（表、ビュー、スナップショット、索引、クラスタ、シノニム、順序、プロシージャ、ファンクションおよびパッケージが含まれる）
- 整合性制約
- データベース・オブジェクトの領域割当て
- オブジェクトにアクセスまたは更新したユーザーなどの履歴情報

Oracle Internet Directory のアンインストール

Oracle Internet Directory をアンインストールするには、次のステップを実行します。

1. Oracle Internet Directory サーバーを停止します。

   ```
   $ oidctl connect=<net_service_name> server=oidldapd
   instance=<server_instance_number> stop
   ```

   <net_service_name> は、Oracle Internet Directory サーバーへのネットワーク接続文字列になり、*<server_instance_number>* はインスタンスの番号です。この番号は、Oracle Directory Manager の「Server List」タブに表示されています。

2. OiD Monitor を停止します。

   ```
   $ oidmon stop
   ```

3. 3-2 ページの「Oracle Universal Installer」で説明されている手順に従って、Oracle Universal Installer を起動します。

4. 「Welcome」画面の「De-install Products」ボタンか、Oracle Universal Installer の任意の画面で「Installed Products...」ボタンをクリックします。「Inventory」ダイアログ・ボックスに、インストール済みの製品がリスト表示されます。

5. 「Inventory」ダイアログ・ボックスで、アンインストールする製品を選択し、「Remove」ボタンをクリックします。

索引

C

CDE 1.2
　libDTSvc パッチ，1-12
CD-ROM
　マウント，3-4
Chadwick, David，iv
Chinese TrueType fonts パッチ，1-12
CLASSPATH 変数，4-8
coraenv スクリプト
　シングル・インスタンスのマシン，4-9
　複数のインスタンスのマシン，4-9

D

DB_DOMAIN パラメータ，4-12
DB_NAME パラメータ，4-12
dba UNIX グループ，2-9
dbca.rsp ファイル，3-15
dbora ファイル，4-5
dbshut スクリプト，4-4
dbstart スクリプト，4-4
DISPLAY 変数，2-12
DR01.DBF
　データ・ファイル，4-14
　含んでいる表領域，4-14
DRSYS 表領域
　説明，4-14
Dynamic linker パッチ，1-12

F

「File Locations」画面，3-6

G

Good, Gordon，v

H

Howes, Tim，iv

I

INDX01.DBF
　データ・ファイル，4-14
　含んでいる表領域，4-14
INDX 表領域
　説明，4-14
init.ora ファイル，4-11
installActions.log ファイル，3-14
Interprocess Communication パラメータ
　要件，2-7
ipcs コマンド，2-7

J

Java 実行時環境
　CLASSPATH 変数，4-8
　オペレーティング・システムのパッチ，1-12
　必須のバージョン，3-6
　変更
　　注意点，1-12
　要件，1-12

K

Kernel パッチ，1-12

L

LD_LIBRARY_PATH 変数，4-7
LibC パッチ，1-12
Libthread パッチ，1-12
Linux カーネル
　パラメータ設定，2-4，2-6
login ファイル，2-14，4-6

M

Motif Runtime Library パッチ，1-12
mount コマンド，3-2

N

Net8
　TNS_ADMIN 変数，4-8
　インストール後の作業，4-8
　ローカル・ネーミング，4-9
Net8 Configuration Assistant
　インストール中に自動起動，3-10，3-12
　レスポンス・ファイル，3-15
net8ca.rsp ファイル，3-15
NLS_LANG 変数，2-13

O

OEM_REPOSITORY.ORA
　データ・ファイル，4-14
OID Configuration Assistant
　Oracle Database Configuration Assistant の自動起動，3-12
　インストール中に自動起動，3-12
oinstall UNIX グループ，2-9，3-6，4-3
OpenLDAP コミュニティ，v
OpenWindows 3.6
　Xsun パッチ，1-12
OPERATOR ロール，2-9
Oracle Database Configuration Assistant
　oratab ファイル，4-11
　レスポンス・ファイル，3-15
Oracle Database Migration Assistant
　インストール中に自動起動，3-10
Oracle Internet Directory
　「Database File Location」画面，3-8
　アップグレード，3-12
　インストール後の作業，4-12，4-17
　インストール前の作業，2-13，2-14
　管理者のパスワード，3-9
　データベース作成，3-8
　デフォルト設定，3-9
　初めてのインストール，3-8
　要件，1-11
Oracle Server
　起動および停止の自動化，4-4
　正常終了，4-5
　セキュリティ，2-9
　正しい再起動，4-5
Oracle Universal Installer
　「File Locations」画面，3-6
　「Oracle Internet Directory Database File Location」画面，3-8
　「UNIX Group Name」画面，3-6
　「Welcome」画面，3-6
　インベントリ，1-12，3-14
　サイレント・インストール
　　「インストール , 非対話モード」を参照
　製品のアンインストール，4-17
　レスポンス・ファイル
　　エラー処理，3-16
　　妥当性チェック，3-17
　　レスポンス・ファイルの指定，3-16
　ログ・ファイル，3-14
ORACLE_BASE 変数
　説明，2-13，4-7
ORACLE_HOME 変数
　Oracle Universal Installer の起動，3-6
　oracle アカウントのホーム・ディレクトリ，2-10
　説明，2-13，4-8
　要件，1-11
ORACLE_SID 変数，2-13，4-8
oracle アカウント
　インストール後の作業，4-6
　インストール前の作業，2-11
　作成方法，2-10
　ホーム・ディレクトリ，2-10
　要件，2-10
Oracle インベントリ
　JRE の場所，1-12
　ログ・ファイル，3-14
oracle ソフトウェアの所有者
　「oracle アカウント」を参照
Oracle ロール

SYSDBA および SYSOPER，2-9
oraenv スクリプト
シングル・インスタンスのマシン，4-9
複数のインスタンスのマシン，4-9
oraInst.loc ファイル，1-12，2-7，3-14
orainstRoot.sh ファイル，3-6
oraInventory ディレクトリ，3-14
oratab ファイル，4-5
インストール後の作業，4-10
OSDBA および OSOPER グループ，2-9，4-2

P

PATH 変数，1-10，2-13，4-8
pkginfo コマンド，1-9

R

RBS01.DBF
データ・ファイル，4-14
含んでいる表領域，4-14
RBS 表領域
説明，4-14
REDO ログ・ファイル
REDO01.LOG，4-15
REDO02.LOG，4-15
REDO03.LOG，4-15
初期データベース内，4-15
root.sh スクリプト，4-8
実行，3-9
root ユーザー
インストール後の作業，4-2
インストール前の作業，2-7
runInstaller コマンド，3-5
パラメータ，3-16

S

SERVICE_NAMES パラメータ，4-12
SGA
「共有グローバル領域」を参照
SID
「システム識別子」を参照
silentInstall.log ファイル，3-16
Smith, Mark，iv，v
Solaris
問題と制限事項，1-14
SYSDBA および SYSOPER ロール，2-9
SYSTEM01.DBF
データ・ファイル，4-13
含んでいる表領域，4-13
SYSTEM 表領域
説明，4-13

T

TEMP01.DBF
データ・ファイル，4-13
含んでいる表領域，4-13
TEMP 表領域
説明，4-13
TNS_ADMIN 変数，4-8
TOOLS01.DBF
データ・ファイル，4-14
TOOLS.DBF
含んでいる表領域，4-14
TOOLS 表領域
説明，4-14
TWO_TASK 変数，4-9

U

umask コマンド，2-11
umount コマンド，3-2
「UNIX Group Name」画面，3-6
UNIX アカウント
作成方法，2-10
UNIX カーネル
設定方法，2-7
パラメータ設定，2-2，2-3，2-5，2-7
UNIX システム
要件のサマリー，2-2
USERS01.DBF
データ・ファイル，4-13
含んでいる表領域，4-13
USERS 表領域
説明，4-13

W

「Welcome」画面，3-6

X

X Input and Output Method パッチ，1-12
X Windows
　設定，1-10

あ

アカウント
　oracle アカウントの作成，2-10
アップグレード，3-6
アンインストール
　Oracle Universal Installer の使用，4-17
　Oracle ソフトウェア，4-17

い

インストール
　異常終了，3-14
　インストール後の作業，4-1
　インストール前の作業，2-1
　概要，1-2
　キャラクタ・モード，1-14
　クリーン・アップ，3-14
　サイレント・インストール，3-15
　非対話モード
　　エラー処理，3-17
　　キャラクタ・モードの使用，1-14
　　説明，3-15
　　レスポンス・ファイル，3-15
　　ログ・ファイル，3-16
　要件
　　環境，2-11
インストール後の作業
　Oracle Internet Directory，4-12，4-17
　root.sh の実行，3-9
　データベースの起動および停止の自動化，4-4
インストール・タイプ
　Oracle8*i* の概要，1-2
インストール前の作業
　Oracle Internet Directory，2-13，2-14
　root ユーザー，2-7

お

オペレーティング・システム
　設定，2-2
　パッケージ
　　インストール済みを調べる，1-9
　要件，1-14

か

カーネル
　パラメータ設定，2-2，2-3，2-4，2-5，2-6，2-7
環境
　共通の環境の作成，4-9
　現在のセッションの更新，2-14
　要件，2-11
環境変数
　CLASSPATH，4-8
　DISPLAY，2-12
　LD_LIBRARY_PATH，4-7
　NLS_LANG，2-13
　ORACLE_BASE，2-13，4-7
　ORACLE_HOME，2-13，3-6，4-8
　ORACLE_SID，2-13，4-8
　PATH，2-13，4-8
　TNS_ADMIN，4-8
　TWO_TASK，4-9
管理者
　UNIX アカウント，4-2
　ロール，2-9

き

起動および停止，4-4
起動および停止の自動化，4-4
キャラクタ・モード
　問題と制限事項，1-14
共有グローバル領域
　共有メモリーの設定，2-7
共有メモリー
　ipcs コマンド，2-7
　最大値，2-8
　設定，2-7
許可
　umask を使用した設定，2-11

く

グループ
　dba，2-9
　oinstall，2-9，3-6，4-3

OSDBA および OSOPER，4-2
「UNIX Group Name」画面，3-6
作成方法，2-9
グローバル・データベース名
定義，3-11，4-12

こ

コマンド
ipcs，2-7
mount，3-2
runInstaller
起動，3-5
パラメータ，3-16
umask，2-11
umount，3-2

さ

サイレント・インストール
「インストール,非対話モード」を参照

し

システム・グローバル領域
init.ora ファイル，4-11
システム識別子
説明，4-8
定義，3-11
複数の Oracle ホーム，4-13
システム要件，1-2
初期化パラメータ・ファイル
INIT.ORA，4-14
説明，4-14
データベース内，4-14
初期化ファイル，2-14，4-6

す

スクリプト
dbshut，4-4
dbstart，4-4
oraenv（coraenv），4-9
root.sh，3-9

せ

制御ファイル
CONTROL01.CTL，4-16
CONTROL02.CTL，4-16
CONTROL03.CTL，4-16
セキュリティ
データベース管理者，2-9
ファイルの検証，4-2
セマフォ
値の設定，2-8
要件，2-3，2-4，2-5，2-6

そ

ソフトウェア
マウント・ポイント，2-9

て

停止および起動，4-4
ディレクトリ・サービス
設定，2-14
データ・ディクショナリ
説明，4-17
データ・ファイル
DR01.DBF，4-14
INDX01.DBF，4-14
OEM_REPOSITORY.ORA，4-14
RBS01.DBF，4-14
SYSTEM01.DBF，4-13
TEMP01.DBF，4-13
TOOLS01.DBF，4-14
USERS01.DBF，4-13
データベース
REDO ログ・ファイル，4-15
インスタンス名，4-8
起動および停止の自動化，4-4
作成方法
Oracle Internet Directory，3-8
初期化パラメータ・ファイル，4-14
制御ファイル，4-15
データ・ディクショナリ，4-17
データ・ファイル，4-13
表領域，4-13
マウント・ポイント，2-9
ロールバック・セグメント，4-16

データベース管理者
「管理者」を参照
デフォルト REDO ログ・ファイル
REDO01.LOG，4-15
REDO02.LOG，4-15
REDO03.LOG，4-15
デフォルト初期化パラメータ・ファイル
INIT.ORA，4-14
デフォルト制御ファイル
CONTROL01.CTL，4-16
CONTROL02.CTL，4-16
CONTROL03.CTL，4-16
デフォルト・データ・ファイル
DR01.DBF，4-14
INDX01.DBF，4-14
RBS01.DBF，4-14
SYSTEM01.DBF，4-13
TEMP01.DBF，4-13
TOOLS.DBF，4-14
USERS01.DBF，4-13
デフォルト表領域
DRSYS，4-14
INDX，4-14
RBS，4-14
SYSTEM，4-13
TEMP，4-13
TOOLS，4-14
USERS，4-13

は

パスワード
変更，4-2
パッチ
Java 実行時環境，1-12
パラメータ
init.ora ファイル，4-11
初期化，4-11

ひ

非対話モードのインストール，1-14
表領域
DR01.DBF を含む，4-14
DRSYS，4-14
INDX，4-14
INDX01.DBF を含む，4-14
RBS，4-14
RBS01.DBF を含む，4-14
SYSTEM，4-13
SYSTEM01.DBF を含む，4-13
TEMP，4-13
TEMP01.DBF を含む，4-13
TOOLS，4-14
TOOLS.DBF を含む，4-14
USERS，4-13
USERS01.DBF を含む，4-13
大量のソート用の拡張，4-13
データベース内，4-13

ふ

ファイル
coraenv，4-9
dbora，4-5
dbshut，4-4
dbstart，4-4
init.ora，4-11
installActions.log，3-14
login ファイル，2-14，4-6
Oracle Universal Installer のログ・ファイル，3-14
oraenv，4-9
oraInst.loc，1-12，2-7，3-14
orainstRoot.sh，3-6
oratab，4-5，4-10
root.sh，3-9，4-8
silentInstall.log，3-16
インストール・ログ
非対話モード，3-16
許可，4-3
作成許可の設定，2-11
セキュリティ，4-2
レスポンス・ファイル，3-15
複数の Oracle ホーム
システム識別子，4-13

ほ

ホーム・ディレクトリ，2-10

ま

マウント・ポイント
ネーミング規則，2-9

も

問題と制限事項
　ポート固有，1-11

よ

要件
　Interprocess Communication パラメータ，2-7
　Java 実行時環境，1-12
　Oracle Internet Directory，1-11
　ORACLE_HOME，1-11
　oracle アカウント，2-10
　UNIX グループ，2-9
　UNIX システムの設定，2-2
　オペレーティング・システムのバージョン，1-14
　カーネル・パラメータ設定，2-2，2-3，2-4，2-5，
　　2-6，2-7
　システムのインストール，1-2
　セマフォ，2-3，2-4，2-5，2-6
　ハードウェア，1-3
　マウント・ポイント，2-9

り

リポジトリ
　専用表領域とデータ・ファイルの作成，4-14

れ

レスポンス・ファイル
　エラー処理，3-16
　準備，3-15
　妥当性チェック，3-17

ろ

ロールバック・セグメント
　初期データベース，4-16